

見島ジーコンボ古墳群

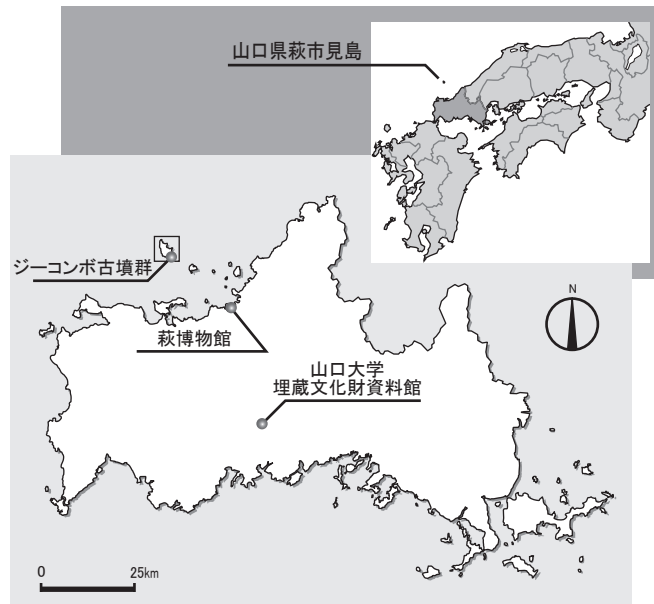
第 128・137 号墳出土資料調査報告

2015

山口大学埋蔵文化財資料館

見島ジーコンボ古墳群

第128・137号墳出土資料調査報告



2015

山口大学埋蔵文化財資料館

序

山口大学が所在する県内五つの地区(山口市:吉田地区・白石地区、宇部市:小串地区・常盤地区、光市:光地区)は、いずれも遺跡の上に立地しています。埋蔵文化財資料館は、本学の施設拡充等工事により遺跡が破壊される可能性が生じた場合、文化財保護のための発掘調査を実施することを主要業務としていますが、その調査・研究成果を報告書の刊行、実物資料展示、データベースの構築など様々な方法により広く地域社会に公開することも重要な責務と考えています。

さて、当館には上記構内遺跡から出土した資料の他にも、山口県の著名遺跡から出土した資料が数多く収蔵されています。これは当館設立以前に本学教員等により調査され、本学各所に収蔵されていたものを継承した資料群です。これらの資料に対し、当館は展示等で活用を図って参りましたが、平成22年度より収蔵資料の継続的な調査研究を推進するため、「館蔵資料調査研究報告書」の刊行を開始いたしました。

平成25年度から26年度にかけては、国指定史跡『見島ジーコンボ古墳群』第128号墳および第137号墳から出土し、当館および萩博物館に収蔵されている資料の調査を実施しました。本書は、その調査報告となります。見島ジーコンボ古墳群は、全国的に著名な古代の墳墓遺跡であるにもかかわらず、調査後実に半世紀以上もの間、出土品の全貌が公開されませんでした。当館が収蔵する県内遺跡資料の中でも特に重要と位置づけられるものです。本書が考古学・歴史学・地域史研究等の基礎資料として活用いただければ望外の幸せです。

最後になりますが、当館の調査・研究活動にあたって、ご支援、ご協力を頂いた萩博物館をはじめ関係機関、関係各位に心から厚く御礼申し上げますとともに、今後とも引き続きご理解、ご鞭撻を賜りますようお願い申し上げます。

平成27年3月

山口大学埋蔵文化財資料館長

山内 直樹

例言

1. 本書は、昭和35年(1960)から昭和37年(1962)の3ヶ年にわたり、山口県教育委員会および萩市教育委員会の合同により実施された、萩市見島に所在する「ジーコンボ古墳群」発掘調査成果の再整理調査報告である。
2. 上記の調査で出土した資料は、萩博物館（山口県萩市堀内355番地所在）と山口大学埋蔵文化財資料館（山口県山口市吉田1677-1所在）に分有保管されている。本書に所収するのは、第128号墳および第137号墳出土資料である。
3. 両館所蔵出土資料の確認および整理作業は、横山成己(山口大学埋蔵文化財資料館助教)、乃美友香(山口大学事務局情報環境部総務係技術補佐員)が行った。資料の実測については横山が行った。写真撮影は横山が、製図・整図は横山・乃美・石丸恵利子(山口大学事務局情報環境部総務係教務補佐員※平成25年4月～11月まで)が行った。なお、萩博物館における調査に関しては、第137号墳出土資料は平成26年1月29日から2月7日にかけて、第128号墳出土資料は平成26年5月12日から6月5日にかけて行った。
4. 第137号墳の測量調査は、平成25年7月24日から25日にかけて横山と石丸が行った。
5. 山口大学埋蔵文化財資料館所蔵の金属器類については、山口大学所蔵学術資産継承検討委員会による予算配分を受け、(株)吉田生物研究所に委託し保存処理を行った。
6. 本書の執筆と編集は横山が行った。
7. 本書を作成するにあたり、下記の方々に協力・助言を得ました。記して感謝の意を表します。
柏本 秋生 樋口 尚樹 清水 満幸 萩博物館各氏 (株)吉田生物研究所
山口大学事務局情報環境部総務係

凡例

1. 本報告書における見島ジーコンボ古墳群の遺構番号は、『見島総合学術調査報告』(山口県教育委員会 1964)で付されたものに準拠している。
2. 見島ジーコンボ古墳群の略号を「MJ」で表記している。第128号墳は「MJ128」となる。資料の種別に関しては萩博物館所蔵品の土器類に「H」、鉄製品に「Hi」、銅製品に「Hbr」、山口大学埋蔵文化財資料館所蔵品の土器類に「Y」、鉄器類に「Yi」、銅製品に「Ybr」の略号をそれぞれ付して識別している。
3. 遺物図の縮尺については、以下のように統一している。
土器…1/2 金属器…1/2
4. 遺物の実測図は、下記のように分類した。
断面黒塗り……須恵器、金属器
断面白抜き……土師器
5. 土器の色調記号は、主として農林省農林水産技術会事務局監修『新版標準土色帖』(1976)に準拠した。

本文目次

第 I 章 遺跡の位置と環境	1
第 1 節 地理的環境	
第 2 節 歴史的環境	
第 II 章 第128号墳の調査	4
第 1 節 昭和36年の現地調査	
第 2 節 第128号墳の出土資料	
第 1 項 土器類	
第 2 項 鉄製品	
第 III 章 第137号墳の調査	35
第 1 節 昭和36年の現地調査	
第 2 節 第137号墳の出土資料	
第 1 項 土器類	
第 2 項 鉄製品	
第 IV 章 まとめ	51

挿図目次

第Ⅰ章 遺跡の位置と環境	……………22
図1 萩市見島遺跡分布図……………3	図9 第128号墳石室外・その他出土土器実測図③……………23
第Ⅱ章 第128号墳の調査	
図2 見島ジーコンボ古墳群分布図……………5・6	図10 第128号墳出土鉄製品実測図……………29
図3 第128号墳石室実測図……………9	第Ⅲ章 第137号墳の調査
図4 第128号墳床面出土土器実測図①……………12	図11 第137号墳石室実測図……………39
図5 第128号墳床面出土土器実測図②……………13	図12 第137号墳石室内出土土器実測図①……………41
図6 第128号墳石室内表土出土土器実測図……………17	図13 第137号墳石室内出土土器実測図②……………42
図7 第128号墳石室外・その他出土土器実測図①……………21	図14 第137号墳石室外出土土器実測図……………47
図8 第128号墳石室外・その他出土土器実測図②……………21	図15 第137号墳石室内出土鉄製品実測図……………47

写真目次

第Ⅱ章 第128号墳の調査	第Ⅲ章 第137号墳の調査
写真1 第128号墳調査時開口部の様子……………7	写真14 第137号墳石室石室調査前……………36
写真2 第128号墳開口部現況……………8	写真15 第137号墳石室調査後……………36
写真3 第128号墳現況……………8	写真16 第137号墳……………36
写真4 第128号墳床面出土土器①……………14	写真17 見島ジーコンボ古墳群史跡公園東地区……………37
写真5 第128号墳床面出土土器①……………15	写真18 見島ジーコンボ古墳群史跡公園東地区……………37
写真6 第128号墳石室内表土……………18	写真19 見島ジーコンボ古墳群第137号墳現況……………37
写真7 第128号墳石室外・その他出土土器①……………24	写真20 第137号墳石室内出土土器①……………43
写真8 第128号墳石室外・その他出土土器②……………25	写真21 第137号墳石室内出土土器②……………44
写真9 第128号墳石室外・その他出土土器③……………26	写真22 第137号墳石室内出土土器③……………45
写真10 第128号墳石室外・その他出土土器④……………27	写真23 第137号墳石室外出土土器……………48
写真11 第128号墳石室外・その他出土土器⑤……………28	写真24 第137号墳出土石室内出土鉄製品……………49
写真12 第128号墳出土鉄製品……………30	写真25 第137号墳出土鉄製品X線画像……………49
写真13 第128号墳出土鉄製品X線画像……………30	

表目次

第Ⅱ章 第128号墳の調査	表4 第137号墳出土遺物(土器)観察表……………50
表1 第128号墳出土遺物(土器)観察表……………31	第Ⅳ章 まとめ
表2 第128号墳出土遺物(鉄製品)観察表……………34	表5 昭和36年(1961)見島ジーコンボ古墳群調査日程……………51
第Ⅲ章 第137号墳の調査	
表3 第137号墳出土遺物(鉄製品)観察表……………49	

第 I 章 遺跡の位置と環境

第1節 地理的環境

萩市見島は、萩市浜崎港から北北西に約46.3km離れた日本海中に浮かぶ孤島である。島の平面形態は南を底辺とする不等辺三角形を呈し、南北約4.6km、東西約2.5km、島周約24.3kmを測り、総面積はおよそ7.8km²となる。

見島は火山島であり、地質は玄武岩類、角礫凝灰岩および海岸低地部の沖積層で構成される。島は中央部から西部にかけて高く、現在航空自衛隊見島分屯基地が置かれるイクラゲ山(標高181m)が最高峰となっている。また、瀬高と呼称される中央山地により南北が分断されており、島の南部および北東部に見られる湾入部周域には僅かながら沖積低地が形成されている。それぞれに本村・宇津の集落が発達し、現在でも島への数少ない出入口として存在する。

これら海岸域にある天然の低地には、島裾を洗う波浪から生じた岩屑が砂礫浜堤や礫浜堤を形成している。見島ジーコンボ古墳群は、島の南岸線東端の晩台山南麓から、本村港の東にある孤立丘高見山の東麓までの間に形成された、東西長約300m、幅約50m～100m、標高約7mの礫浜堤(横浦海岸)に立地している。

第2節 歴史的環境

1. 遺跡の分布状況(図1)

見島に埋存する遺跡の様相については、ジーコンボ古墳群以外は全く明らかとなっていないと言っても過言では無かろう。現在公表されている埋蔵文化財包蔵地の分布についても、山口県教育委員会と萩市教育委員会が昭和35年(1960)から同37年(1962)まで実施した合同調査に負うところが大きい。

見島における踏査は、昭和35年合同調査の9月4日から3日間にかけて実施したとされる。『見島総合学術調査報告』では、その成果として島内の13地点が紹介されているが、現在の周知の埋蔵文化財包蔵地と照合すると、「見島小学校々庭付近の遺物包含層」「薬師堂背後の遺物包含層」「見島体育館付近の遺物散布地」が見島本村遺跡(図1の1)、「本村東区の遺物散布地と包含層」「本村部落の東部の水田」「杉山西南斜面の遺物散布地」が堅田遺跡(図1の2)、「片尻の遺物散布地」が片尻遺跡(図1の6)、「草谷の遺物散布地」が草谷遺跡(図1の7)、「船戸の遺物散布地」が船戸遺跡(図1の9)、「船見田の遺物散布地」が船見田遺跡(図1の10)、「大竹の遺物散布地」が大竹遺跡(図1の11)、「瀬田の石器発見地」が瀬田遺跡(図1の3)に該当するようである。現在の本村港と本村漁港の間にある小丘で、古く大正5年(1916)に土師器壺2点と硬玉製勾玉1点が出土したとされ、昭和35年の合同調査においても土師器壺片4点が確認された「宮崎山の遺物散布地」は、その後明確な資料の採取に恵まれなかったのか現在では包蔵地から除外されている。また、合同調査における踏査がジーコンボ古墳群発掘調査の前提としての「見島における居住の時代的上限」「古墳の築造に先行する文化の有無」「当時の地形や島の生産力」「村落の規模とその継続期間」の確認等に目的を置いていたためか、当時既にその位置が推定されていた中世の城館跡である要害山城跡(図1の4)、高見山城跡(図1の5)に関して言及されていない。また、平成元年(1989)発行の『萩市史』第2巻では、要害山城跡の北北西約1kmの丘陵上に

土塁・石垣が見られることから、城跡の存在が指摘されている(図1の8)。^{註4}

以上、見島において確認されている遺跡の分布状況を概観した。居住に適した低地が狭小である見島においては、工事中の埋蔵文化財の発見もやはり限定的な地域に限られるようであり、昭和30年以降の新知見もほぼ存しない状況と言える。

2. 見島ジーコンボ古墳群造営以前の見島

前述したように、萩市見島においてはジーコンボ古墳群以外の遺跡に未だ調査の鉞が入れられていない。そのため、各遺跡で採取された断片的な資料からジーコンボ古墳群造営以前の様相を推し量る他手段がないようである。

萩市見島発見の先史時代遺物に関しては、平成元年(1989)発行の『萩市史』に詳しい。同書によると、昭和35年(1960)より開始された合同調査の段階では、弥生時代以前に所属する遺物は同年に本村寺山南麓の宅地(図1の3)で小学生児童により発見された環状石斧の1点に限られた状態であったが、昭和45年(1970)に本村の中国電力島内発電所の増築工事にて縄文時代中期に比定される土器片が、昭和59年(1984)には見島小学校南方の水田基盤整備工事にて、遺物包含層と見られる黒褐色粘土層中から縄文時代後晩期の土器片とともに石棒片、打製石斧、石錘、そして環状石斧片などが出土したとされる。両地点とも現在の堅田遺跡(図1の2)内に位置しており、見島における人類活動が島南端の沖積低地部において開始されたことを示唆する重要な資料となっている。弥生時代の遺物については、同じく見島小学校南方水田基盤工事で確認された黒褐色粘土層中から弥生時代前・後期の土器片が出土しているが、その総量はさして多くないようである。古墳時代の遺物も、やはり堅田遺跡を中心に多数の土師器、須恵器が採集されている状況である。昭和35年調査に伴い実施された踏査で、現在見島本村遺跡と命名されている地点で確認された多数の遺物も、主として当時代に所属するものと推される。

上記の資料はいずれも正式な発掘調査を経ずしての採集品であり、遺構の確認がなされていない状況下では見島の先史時代について多くを語り得ない。現状としては、見島では古く縄文時代中期から弥生時代にかけて、本土に面する本村周辺域において少なくとも一時的な人類の上陸活動が行われ、古墳時代に至ると小規模ではあろうが同地域に集落が形成され定住生活が行われたものと推察するに止めたい。

【註】

- 1) 地理的環境は文献8による。
- 2) 斎藤・小野(1964)の400～402頁
- 3) ジーコンボ古墳群に関する最初期の報告は大正12年(1923)に三輪善之助氏によってなされている(三輪1923)が、その文中に「古墳」の項目で宮崎山出土遺物が紹介されている。
- 4) 合同調査前年である昭和34年(1959)に発行された『萩市誌』には、明確な位置は示されていないが城山址として高見山城跡の存在が、古城址として要害山城跡の存在が記されている。また平成元年(1989)発行の『萩市史』第2巻(中村・国守1989)では、本村 北西部のみのぼし山(養干山:標高130m)山上に土塁・石垣が構築されていることが指摘され、「みのぼし山城」の仮名が付されているが、埋蔵文化財包蔵地名としては「要害山城跡」が用いられている。
- 5) 大正15年(1926)に実施された山高郷土史研究会による見島の調査報告(匹田ほか1927)には見島小学校敷地(現:見島総合センター敷地)にて採取されたとされる弥生土器が報告されており、本村宮崎山での弥生土器採取にも言及されている。同じく両地について、昭和10年(1935)の山本博氏の報告(山本1935)には土器実測図が付されているが、直ちに「弥生土器」とは判じがたいものであり、現在資料の所在も不明確であることから『萩市史』では確実な資料として認めていない。



国指定 史跡 見島ジークンボ古墳群

- 1 見島本村遺跡 集落跡 (縄文～中世)
- 2 堅田遺跡 散布地 (縄文～古代)
- 3 瀬田遺跡 散布地 (弥生)
- 4 要害山城跡 城館跡 (中世)
- 5 高見山城跡 城館跡 (中世)
- 6 片尻遺跡 散布地

- 7 草谷遺跡 散布地
- 8 要害山城跡 城館跡 (中世)
- 9 船戸遺跡 散布地
- 10 船見田遺跡 散布地
- 11 大竹遺跡 散布地

萩市 (1971) 『萩市地形図 7』 (国土座標第Ⅲ系) を転載・加筆

図1 萩市見島遺跡分布図

第II章 第128号墳の調査

第1節 昭和36年の現地調査

昭和35年(1960)から3ヶ年にわたり実施された見島ジーコンボ古墳群学術発掘調査では、初年次が分布調査に当てられており、第128号墳は、古墳群西部域を調査の対象とした2年次の昭和36年(1961)に発掘調査の手が加えられている。第128号墳の出土資料は、現在となつては経緯不明であるが、萩博物館と山口大学埋蔵文化財資料館に分有保管されている。遺物袋に同封されている注記カードを確認すると、

【萩博物館】

- 萩①「見島ジーコンボ古墳群 128号 第27図-3」
- 萩②「見島ジーコンボ古墳群 128号 第27図-4」
- 萩③「見島ジーコンボ古墳群 128号 1961.9.4 床面」
- 萩④「見島ジーコンボ古墳群 128号 棺内表土中 19610903」
- 萩⑤「見島ジーコンボ古墳群 128号 攪乱層 19610903」
- 萩⑥「見島ジーコンボ古墳群 128号 棺外 19610903」
- 萩⑦「見島ジーコンボ古墳群 128号 19610903」
- 萩⑧「見島ジーコンボ古墳群 63MJ128号」

【山口大学埋蔵文化財資料館】

- 山①「見島 128号 表土 棺外 S.36.9.2」(コンテナNO.31 袋NO.1)
- 山②「見島 128号 表土 (棺外) S.36.9.2」(コンテナNO.32 袋NO.12)
- 山③「見島 128号 表土 (棺外) S.36.9.2」(コンテナNO.34 袋NO.20)
- 山④「見島 128号 床面 S.36.9.3」(コンテナNO.31 袋NO.17)
- 山⑤「見島 128号 棺内 床面 S.36.9.4」(コンテナNO.31 袋NO.20)
- 山⑥「見島 128号」(コンテナNO.32 袋NO.27)

の14枚、日付と出土地点等で大別すると11種の記載が存在することが明らかとなった。以上のカードから調査経過を復元すると、第128号墳の調査は昭和36年9月2日に着手され、表土を除去し石室の輪郭を検出したものと思われる(山①～③)。翌9月3日より石室埋積土の掘削を進めたようで(萩④)、同日中に床面(一部か)を検出したようである(山④)。9月4日は床面精査と諸記録作業が実施されたものと推定される(萩③・山⑤)。

注記カードの中で、萩⑤の「攪乱層」と萩⑧「63MJ128」はやや理解に苦しむ。萩⑤は9月3日の日付であり、攪乱されていた石室内埋積土と想像されるが、石室外堆積土の可能性も否定できない。萩⑧の「63」は「昭和36年」もしくは「(19)61」を誤記したものであろうか。

現在まで遺構実測原図や調査日誌等、当時の調査記録が発見されていないため、『見島総合学術調査報告』に記載された第128号墳の調査成果報告文と、調査時の写真(写真1)を転載するとともに、山口大学埋蔵文化財資料館に保管されている「第26図 第128号墳石室実測図」トレース原図の再トレース図(図3)を掲載する。

- 昭和36年(1961)・昭和37年(1962)調査墳
- 昭和57年(1982)調査墳
- 出土資料調査報告既刊の調査墳※昭和36年調査
- 本書の調査対象墳 ※昭和36年調査

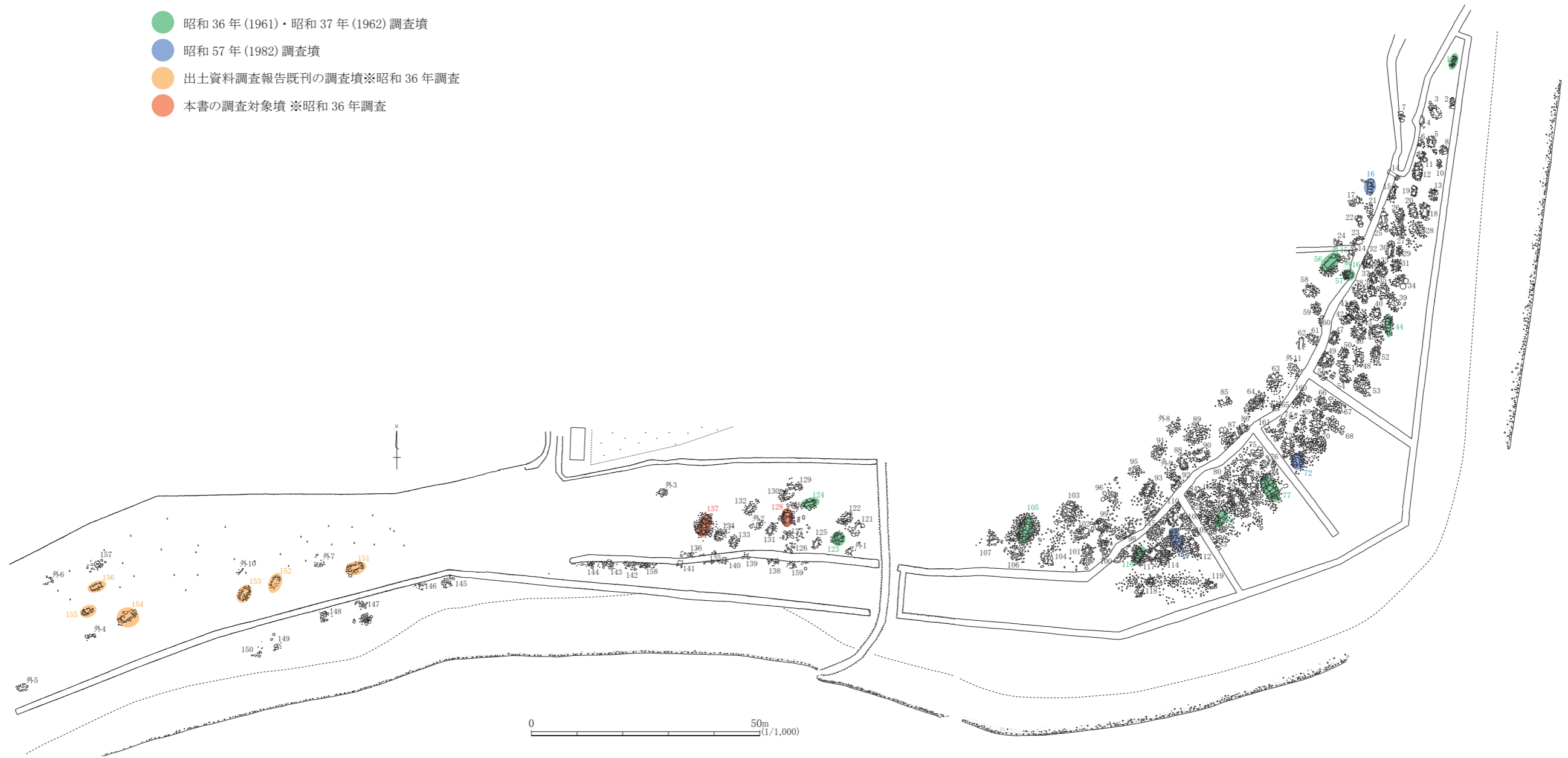


図2 見島ジーコンボ古墳群分布図



写真1 第128号墳調査時開口部の様子（南から）

斎藤・小野 1964「図版22（上）第128号墳」を転載

第128号墳 第123号墳の西北西約10メートルの地点にあって、この付近にも石室が多く、第124号、第127号第130号、第131号墳の石室と2、3メートルしか離れていないほど密集している。浜堤の頂上付近に当る高みに立地し、側石の上部から上が露出している。天井石は1筒だけ遺存し、積石は取り除かれて石室の周辺に残存するにすぎない(第26図、図版22)。

奥石には1筒の自然石を用い、側石は東側11筒、西側9筒で、大部分横積みに1重あるいは2重に積んでいるが、なかには縦に組んだものもあって、径10～35センチ大の小石塊を盛って入口をふさいでいる。方位はS19°Wで、奥行330センチ、高さ65センチを測る。床面は径2、3センチ大の砂利を敷く礫床で、細長く、石室の高さが低いところに特色がある(第26図、図版22)。

人骨は保存が悪く、小さな断片になっていて、奥壁に近い付近から中央辺までの間に比較的多く散在していた。副葬品には壺の破片4個体分と蓋坏、盃の破片や1筒分の土師器の盃を検出している。これらの副葬品のうち、土師器に比べて須恵器が多く、



写真2 第128号墳開口部現況（南から）※2012年12月撮影



写真3 第128号墳現況（西から）※2012年12月撮影

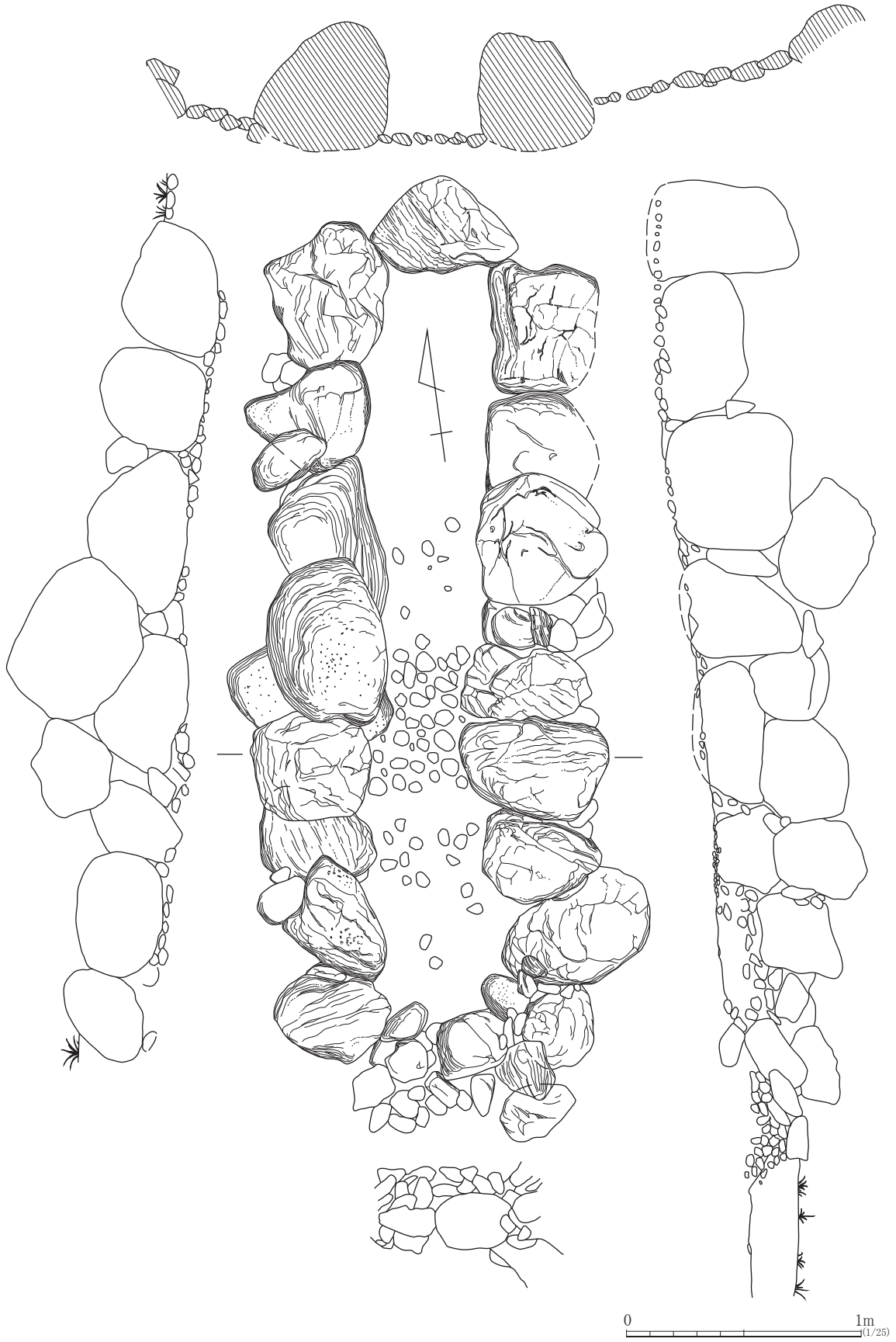


図3 第128号墳石室実測図

それらはほとんど石室の入口付近から出土した。なお、石室の内部から1個体分の犬の頭骨と下顎骨が出土した。

他に、鉄鏃片が発見されて、4片からなっているが、4本分と見なされる。いずれも細手の尖根式のものである。

須恵器片は130片。上師器の細片は数片。厚手の須恵器片は外面格子目をのこす例(第24-1)を除いて、他はすべて平行条叩き目をのこし、内面はほとんど青海波をとどめる。わずかに同心円が見られる例(同図-2)もある。

薄手は被せ式の蓋の破片(同図-3・4)と坏の破片と思われる。断片から見たところでは、蓋には擬宝珠状の撮みのあるものが多く、坏はすべてへら起こしの平底で付け高台のあるものもある。

石室内の流上中からも290片の須恵器片が出土したが床面出土のものと同種のものばかりであった。

上師器片は細片のみであるが、丸底の坏の破片と思われる。

(『見島総合学術調査報告』427-429頁)

第128号墳は北東から南西方向に広がる古墳群のほぼ中央に位置しており、石室25基(第121～144号墳、第158・159号墳)、石室状構造物3基(外1～3)が密集して構築されている(図3)。調査時に西部域の1基に数えられたが、石室の分布を見ると、西方の140番台後半以降の石室群とはやや距離を隔てており、両者間は石室構造や開口方向も異なるものと理解される。

報告によると、石室は浜堤の頂上付近に設けられており、側石の上部から上が露出していたとされ、調査当時と史跡公園化された現況はほぼ同様の景観を示していたものと思われる(写真2・3)。ただし、調査時に1石しか確認されなかった天井石は、現在3石が架されている。

石室構造に関しては簡単に触れられているのみであり、奥壁には自然石1石、左側壁(東側壁)は11石、右側壁(西側壁)は9石で、大部分横積みに1重あるいは2重に積んでいるとされるが、平面図を見ると左壁立面図として描かれる奥側1石目は奥壁と考えられ、下段5石、上段5石の遺存が確認される。11石とされるのは、平面図左側壁開口部に描かれたやや大ぶりの石を側石としてカウントしたものと想像される。右側壁は下段7石、上段2石が遺存している。調査時に遺存した天井石は、写真を見ると左側壁上段第1石と右側石下段第3石と上段第1石(いずれも奥壁より)に架されていたようであり(写真1)、現在復元されている開口部側第1石がこれに該当する(写真2)。

石室規模は奥行330cmとされ、幅に関する記述がないが平面図から40～50cmと推定される。開口部の方位はS19°W。高さは65cmであり、西部域西側の石棺状石室(第151～156号墳:高さが45～54cmに推定)に比して高く構築されている。側壁下段石材の選択や据え方は明らかに上段の構築を意識しており、石棺状石室とは基本的な構造が異なっている。『見島総合学術調査報告』では第128号墳を石棺状石室のBⅡ類に分類しているが、BⅠ・Ⅱ類間の構造差は看過できない。

床面は2、3cm大の礫床とされるが、平面図や写真では5～10cm大の礫が敷かれていたように見える。

第2節 第128号墳の出土資料

第1項 土器類

第128号墳出土土器類は、萩博物館と山口大学埋蔵文化財資料館に分有保管されている。今回の調査で両者が接合した場合は、これまで通り萩博物館に収蔵していただくこととなった。

前述の通り、遺物の注記カードは14枚11種が存在する。ここでは、床面出土資料(萩③・山⑤)とその他の資料が接合した場合は、元来床面に存在した可能性が高いことから「床面出土」とした。同様に棺内表土中(萩④)と床面以外のその他の資料と接合した場合は、石室内に存在した可能性が高いことか

ら「石室内表土出土」とした。このほか、明確に石室外と見られる資料(萩⑥・山①～③)、出土場所の特定が不可能な資料(萩⑤・萩⑦・⑧・山⑥)は「石室外・その他」として報告をおこなう。

【床面出土】(図4・5、写真4・5、表1)

須恵器坏、坏蓋、皿、直口壺、甕が存在する。以下に概要を記す。

H1は坏蓋。3/4を欠失するが、完形復元可能な資料である。平らな天井部から湾曲して口縁に降下する。口縁端部は尖り気味に丸く収める。天井部中央にはつまみが剥離した痕跡があり、剥離面に同心円の刻みが施されている。調整は外面全面に回転ナデ、内面口縁から天井部1/5まで回転ナデ、他は不定方向のナデが施される。天井-口縁境界の稜線で径を復元した。なお、接合資料に床面出土品はないが、同一個体が萩③に含まれるため床面出土に含めた。H2も坏蓋の天井-口縁部片で、口縁部の1/4が遺存する。『見島総合学術調査報告』第27図4が当資料に該当し、さらに4片が接合した。やや高めの天井部から湾曲気味に口縁に降下し、口縁端部は丸みを帯びた鳥嘴状に下垂させる。調整は外面は回転ナデ、内面は口縁部が回転ナデ、天井部は直線的なナデが施されている。H39と同一個体の可能性がある。明確な床面出土の根拠はないが、『見島総合学術調査報告』に記述された「須恵器片は130片～」は床面出土資料数を示すと思われることから、ここに掲載する。H3も坏蓋。低く扁平な天井部からわずかに降下し口縁に移行する。口縁の外方への屈曲も弱い。端部は鳥嘴状に下垂させる。調整は口縁部のみ内外面回転ナデ、天井部は不定方向のナデが施される。『見島総合学術調査報告』第27図3が当資料に該当し、萩⑤1点と接合した。H2と同様の理由で床面出土とする。H4は坏蓋天井部片。口縁境界部と天井部中央つまみ接着部付近で折損している。調整は口縁境界付近が内外面回転ナデ、他は不定方向のナデ。H5は扁平な天井部に擬宝珠形つまみを有する坏蓋天井部片。萩③単体の資料である。外面は灰を多く被る。H6は坏蓋口縁部片。外方に開かないタイプの口縁で、端部は丸みを帯び下垂させる。萩③単体資料。H7も坏蓋口縁部片。口縁下端をわずかに拡張させる。全体的にシャープなつくりで、調整は内外面とも回転ナデを施す。

H8は高台付坏。坏部の大半を欠失するが、完形復元可能である。坏底部やや内側に、外方に張り出す長い高台が付く。坏体部は強く内湾しつつ直立気味に立ち上がり、口縁端部は尖り気味に丸く収める。調整は、内面口縁から底部外方は回転ナデ、内底は不定方向のナデが施される。外面は口縁から体部が回転ナデ、底部付近はカキ目状の回転板ナデが施される。高台から底部外面は回転ナデ。萩③と山③の接合品である。H9～H11は坏口縁部片。H9は器壁が厚く、皿の可能性もある。内外面に回転ナデが施されるが、外面残存部下端には及んでいない。萩③単体資料。H10は口縁-体部片。体部は緩やかに内湾し、口縁端部は尖り気味に丸く収める。口縁外面は重ね焼きにより黒色化しており、縁に緑色の自然釉が溜まっている。H11は屈曲気味に外反する口縁部片。口縁端部は丸く収める。H12は底部から口縁部まで遺存する坏。平底の底部から外方に開きつつ直線的に体部が立ち上がる。口縁端部は丸く収める。口縁内面下端に沈線を1条巡らせる。

H13とY1は接合しないが、調整および焼成具合から同一個体と判断できる。口径に比して器高が低い個体であり、口縁内端を肥厚させる。底部内面には重ね焼きの痕跡が残る。外面稜線にて径を復元。

H14は直口壺の口縁-体部片。やや算盤珠状に胴部が張り出す体部に、短い口縁が付く。内面および口縁外面は回転ナデ、体部外面はカキ目が施される。

H15は器壁の薄いつくりの中型の甕。口縁の成形はシャープであり、口縁外端に凹線を1条巡らせ、下端を断面三角形状に肥厚させる。口縁は内外面とも回転ナデを施し、体部外面には右下がりの平行叩き痕が、内面には放射線状に圧痕が残る弧状格子文当て具痕が残る。図化したのは萩④・萩⑧・山

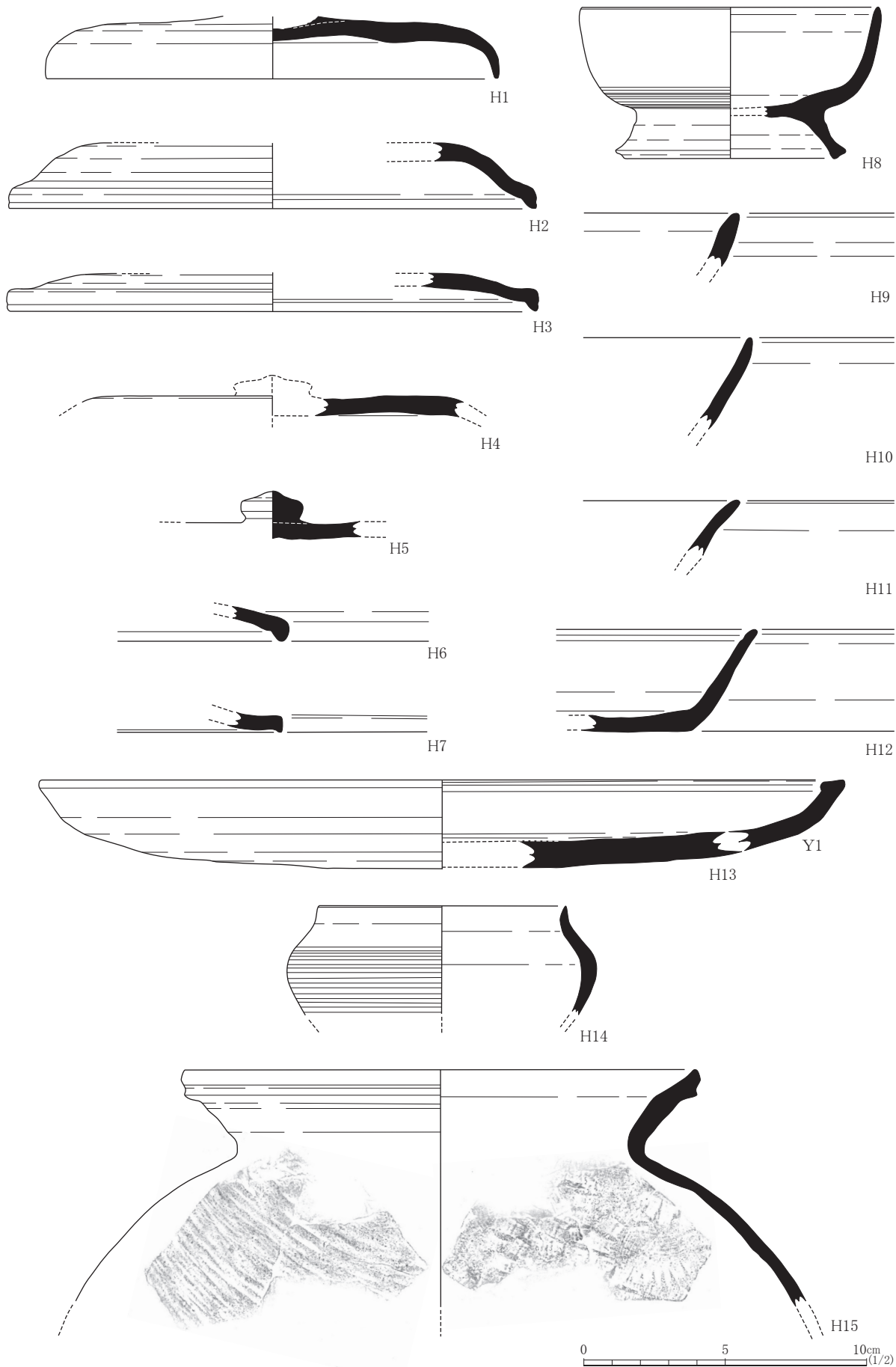


図4 第128号墳 床面出土土器実測図①

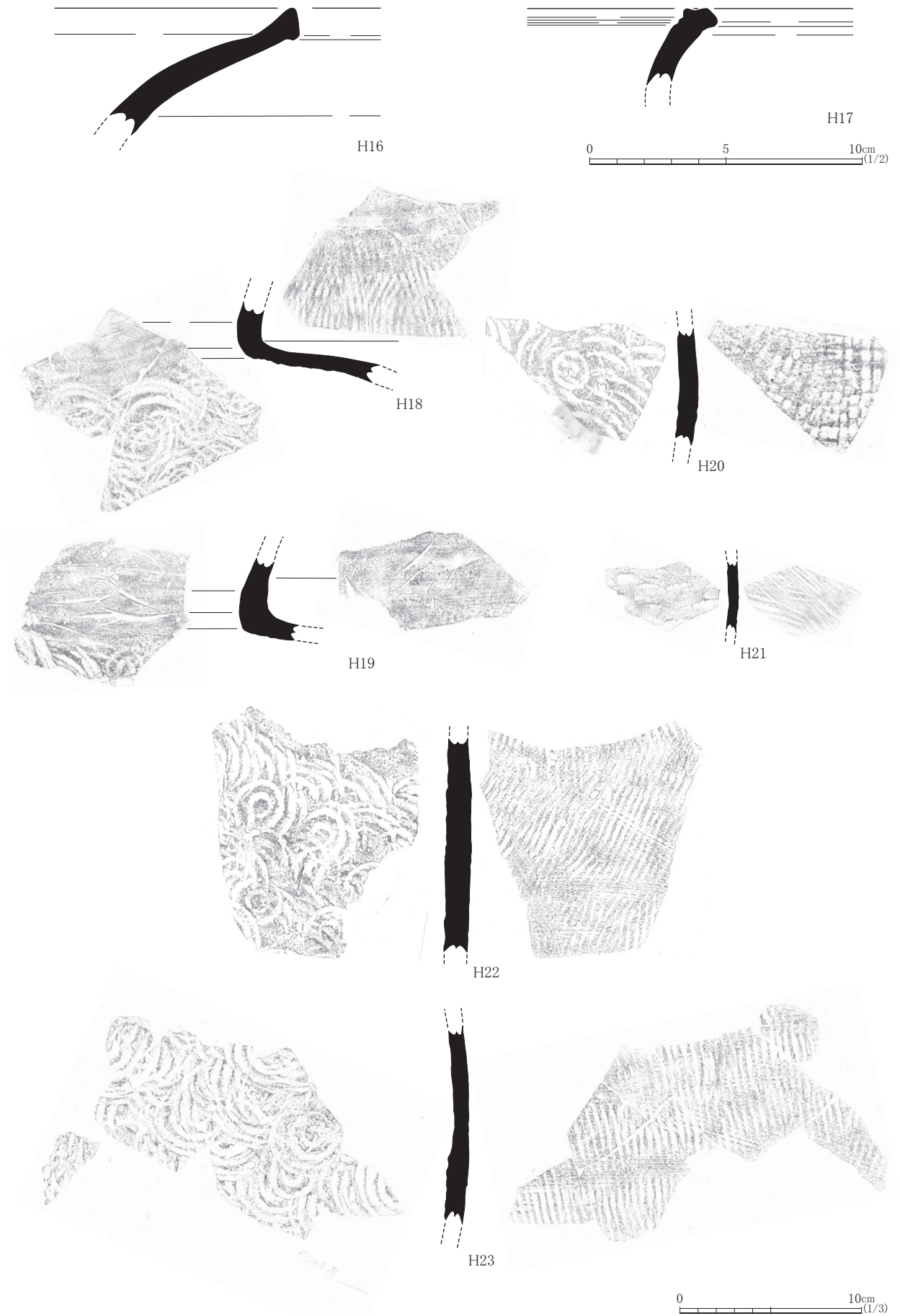


図5 第128号墳 床面出土土器実測図②



写真4 第128号墳 床面出土土器①



H14



H16



H17



H15-1



H15-2



H18-1



H18-2



H19-1



H19-2



H21-1



H21-2



H22-1



H22-2



H23-1



H23-2

写真5 第128号墳 床面出土土器②

③の接合資料だが、同一個体の破片が萩③にも見られるため床面出土に含ませる。H16とH17は甕口縁部片。H16は口縁が外方に大きく開く個体であり、内外端部を肥厚させる。外面には回転ナデが施されるが、内面は多量に灰が被っており調整不明である。H17は軽く外反する口縁部片で、口縁内面に小さな突帯を1条巡らせている。H18～H23は甕頸部または体部片である。H18とH19は体部外面に縦方向の平行叩き、内面に同心円当て具痕が残り、頸部外面には灰が多く被る。器壁の厚みが異なるが同一個体の可能性がある。H20は体部片で、外面に格子叩き、内面に同心円当て具痕が残る。『見島総合学術調査報告』第27図1に該当し、H1・2と同様の理由で床面出土と見なすが、遺物注記内容は萩⑧である。ということは、萩⑧は全て床面または石室内出土品なのであろうか。H21はH15と同一個体と見られる。H22は外面に平行叩き後に横および斜め方向にカキ目を施し、部分的に横方向に指でナデ消す。内面は同心円当て具痕をそのまま残す。H23はH22と同一個体と見られるが、接合資料中の1片が『見島総合学術調査報告』図27図2(遺物注記内容:萩⑧)である。

【石室内表土出土】(図6、写真6、表1)

図化可能資料はごく少量であり、全て須恵器で器種には坏、坏蓋、皿、壺が存在する。

H24は坏蓋。口縁区域の大半を欠失しているが、完形復元可能な資料である。ドーム状の天井部から内湾しつつ緩やかに降下し口縁部に至る。口縁端部は下垂させ丸みを帯びる。天井部にはボタン状つまみが付くが、中央よりややずれて付けられ、焼き歪みも大きい。口縁端部の焼成具合から、坏蓋を重ね焼いたことが分かる。H25は全体の約1/2を欠失するが、完形復元可能な資料である。H24とほぼ同形の坏蓋だが、天井部がやや扁平化している。天井部にボタン状つまみが付くが、これも中央からややずれている。口縁端部の下垂はH24に比してやや鋭い。調整は口縁部内外面が回転ナデ、天井部も内外面回転ナデが施されるが、さらに不定方向のナデが加えられる。内面に重ね焼かれた痕跡を残すが、復元径11.3cmと坏口縁部径としては小さく、裏返された蓋に高台付坏が重ね置かれたのであろう。H26も焼き歪みのある坏蓋の口縁―天井部片。断面実測ポイント以外では天井がドーム状に膨らむ。口縁は斜め外方に緩やかに降下し、口縁端部も同方向に下垂させる。内面と口縁外面に回転ナデ、天井部外面にナデを施す。口縁外面に重ね焼きの痕跡である自然釉が被るが、焼成時に大きくずれたようである。H27も約3/4が欠失する坏蓋の口縁―天井部片。扁平な天井部から緩やかに下降し口縁に至る。口縁端部はほぼ垂直に下垂させ、尖り気味に収める。口縁部のみ内外面に回転ナデが施される。類似形態の坏は、第151号墳に3点(MJ151H31～33)見られる(横山・松浦2012)。H28は口縁端部と天井部中央が欠失している坏蓋。ややドーム状の扁平な天井部から緩やかに口縁に降下する。口縁端部は遺存しないが、ほぼ垂直に下垂するタイプと見られる。天井部中央につまみが存在した痕跡が残る。口縁部は内外面回転ナデ、天井部の外面中央付近は回転ナデ、外方はナデが施され、内面は直線的な指ナデが施される。H29は坏蓋ボタン状つまみ。第128号墳出土坏蓋とは接合しなかった。H30は器壁の厚い個体で、器種を特定できないがここでは坏蓋としておく。天井部外面外方に手持ちヘラ削りが施されている。

H31は高台付坏の底―体部片。底部外端やや内側に、断面方形の小ぶりな高台が付く。高台は内端で接地する。体部はほぼ開かず立ち上がる。H32は無高台の坏で、平底の底部から体部は開き気味に直線的に立ち上がる。内面全面と口縁―体部は回転ナデ、底部外面はヘラ起こし後ナデが施される。

H33は皿。底部と口縁部は接合しないが、胎土と焼成具合、調整から同一個体と見なした。平底から緩やかに内湾して立ち上がる器形で、口縁端部は丸みを帯び外端を肥厚させる。

H34は壺の底―体部片。底部外端に外開きの小ぶりな高台が付く。体部はあまり開かず、明瞭な肩部を形成する。内外全面に回転ナデが施されるが、体部外面下位はヘラナデが施されているようである。

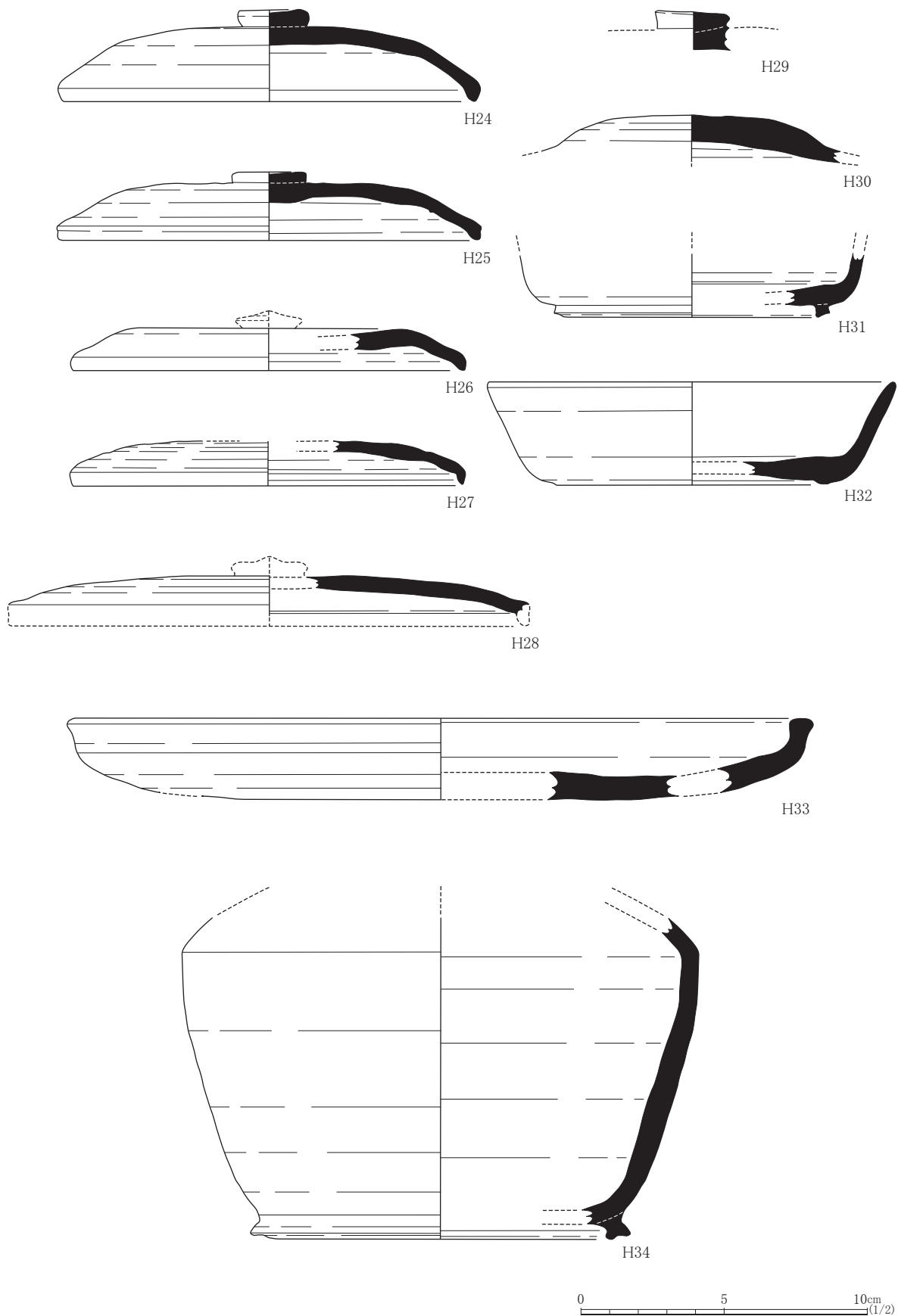


図6 第128号墳 石室内表土出土土器実測図



写真6 第128号墳 石室内表土出土土器

【石室外・その他出土】(図7～9、写真7～11、表1)

前述したとおり、ここでは明確に石室外から出土したもの(萩⑥、山①～③)、出土地点が不明なもの(萩⑤・⑦・⑧、山④・⑥)で、床面および石室内表土出土資料とは接合しない、もしくは同一個体と見なせなかったものを報告する。

多量の土器資料が存在するが、図化可能な土師器は1点のみで、残りは全て須恵器である。須恵器は坏、坏蓋、甕が大多数を占める。

H35は1/2を欠失するが完形復元可能な坏蓋。低いドーム状の天井部から緩やかに内湾して口縁に下降する。口縁端部は鳥嘴状に外方に下垂させる。天井部にはボタン状つまみが付く。歪みの大きな個体で、残存部でも完全には口縁が接地しない。調整は口縁のみ内外面回転ナデを施す。**H36**も低いドーム状の天井部から内湾して口縁に下降する坏蓋であるが、器壁が厚く、**H35**と異なり口縁は屈曲して開く。口縁端部は短く下垂させる。口縁内面は灰が多く被っており、焼成時、裏返しの状態で坏が重ね置かれたものと推測される。**H37**は扁平な坏蓋天井部片。天井と口縁の境界に明確な稜を形成する。口縁端部は欠失する。天井部外面中央につまみが剥離した痕跡を残す。外面全面に回転ナデ、内面は口縁部に回転ナデ、天井部に不定方向のナデを施す。**H38**も**H37**と同様天井一口縁の境界で屈曲するが、口縁はやや内湾気味に下降する。天井部中央と口縁端部を欠失する。外面は口縁に回転ナデ、天井にナデを、内面は口縁から天井外方にかけて回転ナデ、天井中心部は直線的に指ナデを施す。**H39**は復元口径19.4cmの大型の坏蓋。天井部は大きく凹み、大きく内湾しながら口縁に下降する。口縁は軽く外反し、端部を鳥嘴状に下垂させる。比較的シャープな成形で、口縁部内外面に回転ナデ、天井部内外面にナデが施される。**H40**は低いドーム状の天井から緩やかに内湾して口縁に下降する。口縁は外方に強く開き、端部はほぼ垂直に下垂させる。口縁部内外面に回転ナデ、天井部内外面にナデを施す。**Y2**は胎土、焼成状況などから見て**H36**と同一個体である可能性が高いが、接合せず器形もわずかに異なる。焼き歪みによる違いであろうか。**Y3**はシャープな成形の坏蓋口縁部片。口縁を強く外反させ、口縁端部は鳥嘴状で垂直に下垂させる。焼き膨れが生じており、口縁外面の灰被り状況から正置した状態で上に坏が重ねられ焼成されたものと思われる。**H41**は約1/2を欠失するものの完形復元可能な坏蓋である。器壁の厚く扁平な天井部から屈曲して口縁に下降する。口縁の外反はわずかで、やや内向きに端部を下垂させる。下端に面をとることが特徴と言える。天井部にはボタン状つまみが付くが、中央からずれている。口縁外面に灰が被るのは**Y3**と同様の状況であったためと考えられる。口縁部内外面に回転ナデ、天井部は外面がへら起こし後ナデ、内面は不定方向の直線的なナデが施される。**Y4**は坏蓋天井部で報告するが、坏の可能性もある。天井部外面に窯体と見られる砂が多く付着する。**H42**は扁平な坏蓋天井一口縁部片で、扁平な天井から屈曲気味に口縁が開く。天井部中央と口縁端部は欠失する。口縁部内外面に回転ナデ、天井部内外面にナデが施される。他に同一個体と見られる萩⑤と萩⑧の接合品も存在する。**H43**は扁平な天井部を有する坏蓋の天井一口縁部片。口縁は軽く外反させ、端部を鳥嘴状に下垂させる。焼き歪みが大きく、口縁遺存部が完全には接地しない。内面は全面に回転ナデを施した後に天井部に直線的な指ナデを施す。外面は口縁部に回転ナデ、天井部にナデを施す。**H44**も扁平な坏蓋天井一口縁部片。器壁がやや厚く扁平な天井部から緩やかに内湾し口縁に至る。口縁端部を屈曲させほぼ垂直に下垂させる。口縁内面と外面は回転ナデ、天井部内面はナデが施される。器形や胎土、焼成具合から**Y7**と同一個体である可能性が高いが接合せず、口縁内端の処理が異なることから別個に報告する。**H27**も同形の個体である。**H45**は扁平な天井部片。**H46**は坏Hの蓋か。天井部外面に回転へら削りを施す。天井下部は内外面とも回転ナデ、天井部内面にはナデを施す。**Y5**

～Y7は坏蓋口縁部片。Y5は扁平な天井部からやや屈曲気味に口縁を下降させ、端部をほぼ垂直に下垂させる個体である。シャープな成形で、焼成状況も極めて良好である。口縁端部付近のみ回転ナデ、他は外面ナデ、内面は直線的なナデを施す。H47は器壁のやや厚い扁平な天井部から、わずかに内湾して口縁に下降する。口縁は軽く外反させた後に端部を下垂させる。口縁端部内外面は重ね焼きにより変色しており、その状態から坏上に蓋を裏返した状態で載せ、さらに坏を重ねたものと推測される。H48は口縁を強く外反させ、端部を下垂させ丸く収める。内外面とも回転ナデを施す。Y6は扁平な天井部からそのまま口縁に至り、端部のみ鳥嘴状に下垂させる。口縁部付近のみ回転ナデを施す。Y7は前記したH44と同一個体である可能性が高い資料であるが、当資料は口縁内端を段状に凹ませている。口縁付近のみ回転ナデを施す。H49は低い天井部から内湾して口縁に至る。口縁端部は尖り気味に丸く収める。内外面とも回転ナデ。ここでは壺蓋として報告する。

H50とY8は接合しないが胎土と調整、焼成具合から同一個体の高台付坏と判断する。器壁が厚く、丸底気味の底部から内湾して体部が立ち上がる。体部外端には断面方形の小さな高台が付き、内端で接地する。体部はロクロ水引き痕が明瞭に残り、口縁は短く外反させて端部を丸く収める。口縁から体部にかけては回転ナデが施される。H51も高台付坏の底部片。平底の外端に高台が剥離した痕跡を残す。高台径は7cm程度と見られ、小型品である。内外面とも回転ナデが施される。Y9も高台付坏の底部片。底部外端に小ぶりの断面方形の高台が付き。高台は内端で接地する。高台周囲及び内底外方に回転ナデが施される。H52は無高台平底の坏。体部は軽く内湾しつつ開き気味に立ち上がり、口縁は軽く外反する。口縁および体部外面と内面全体に回転ナデ、底部外面にナデが施される。Y10も無高台平底の坏底。体部外面は比較的丁寧にナデが施される。体部内外面は回転ナデ。H53は坏の口縁一体部片。底部との境界で折損しているため高台の有無は不明。わずかに外反しつつ直線的に立ち上がる体部を有し、口縁端部を丸く収める。ロクロ水引き痕が明瞭に残る。残存部は全面に回転ナデが施されている。H63は非常にシャープな成形の個体で、直線的に伸びる体部であり、口縁は尖り気味に丸く収める。外面は口縁端部を除き自然釉がたっぷりと掛かる。残存部は全面回転ナデが施されている。長頸壺の口縁である可能性を残す。H55～61、Y11～13は坏の口縁部片。いずれも小片のため口径復元不能。口縁がやや内湾するH55を除いてはいずれも口縁が外反する。いずれも他の資料とは接合せず、全て別個体と判断した。調整は全て回転ナデが施されている。この内、H60は古墳群出土品の中では優品で、薄い器壁を有し成形もシャープ、焼成状態も極めて良好である。H62はここでは坏底部としておくが、薄い平底の底部から体部が外方に大きく開き立ち上がるようである。体部外面にヨコハケ状の調整が施されている。

Y14は大きく外反する口縁部片である。内外面とも回転ナデが施される。壺の口縁と見られるが、胎土および焼成具合から見てH34と同一個体である可能性が高い。ただし、第128号墳出土資料の中には他に口縁および頸部の破片が見当たらない。H63は長頸壺の体部片。胴の張る算盤珠状の器形であり、胴最大径部の上位に凹線1条を巡らせる。器壁が薄く成形もシャープながら、焼成不良で酸化している。内外面とも回転ナデが施される。萩⑧に同一個体と見られる体部が2点存在するが、底部および頸部、口縁部は見当たらない。

H64は瓶の底部片か。平底から直線的に体部が立ち上がる。底部外面は未調整、体部外面は回転ヘラ削り後回転ナデ、内面は回転ナデが施されている。

Y15～Y19、H65～70は甕。Y15は口縁部片。大きく外反し、内外端部をわずかに肥厚させる。外面は回転ナデ、内面はナデが施される。胎土および焼成具合からH16とは別個体と判断した。Y16は頸～

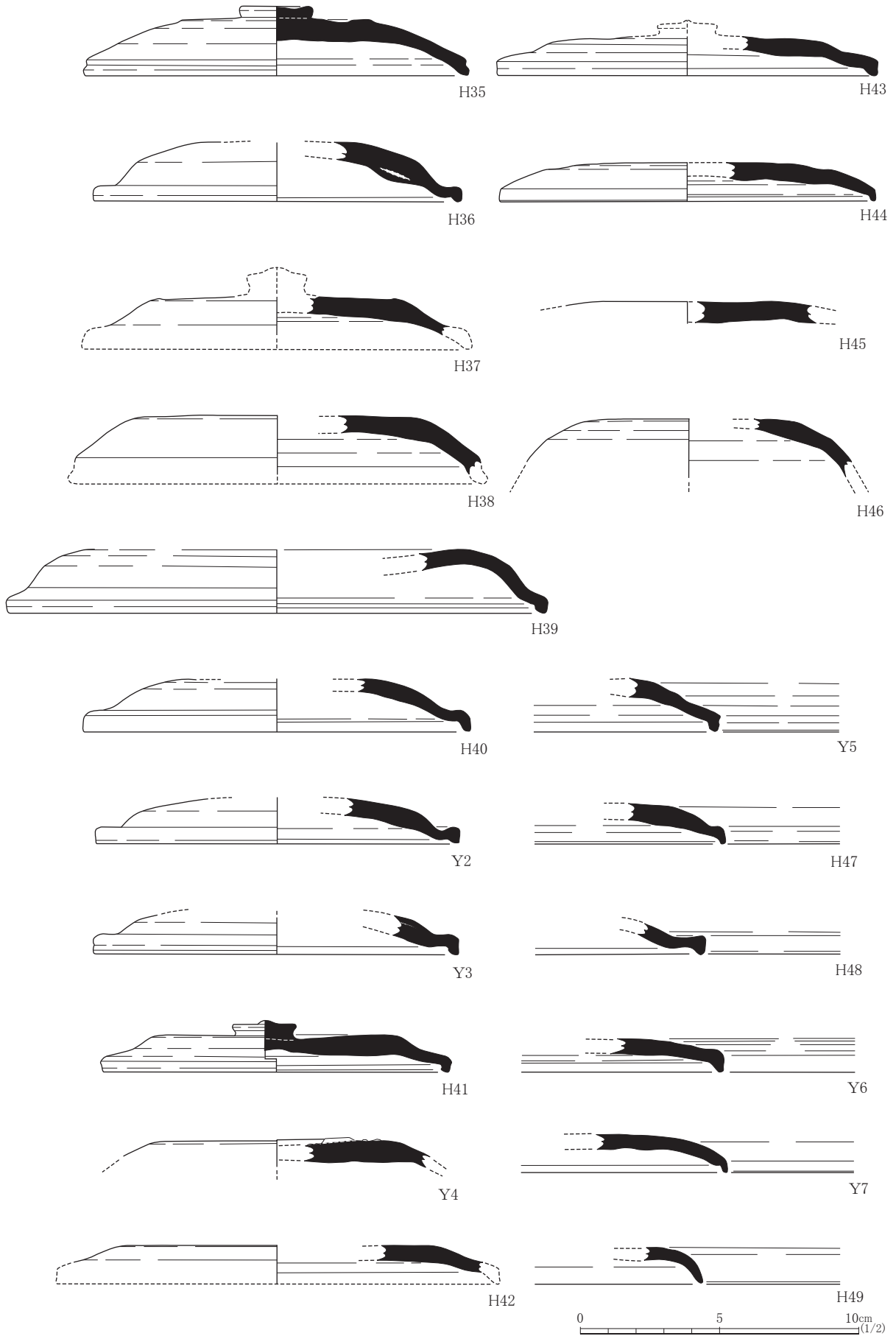


図7 第128号墳 石室外・その他出土土器実測図①

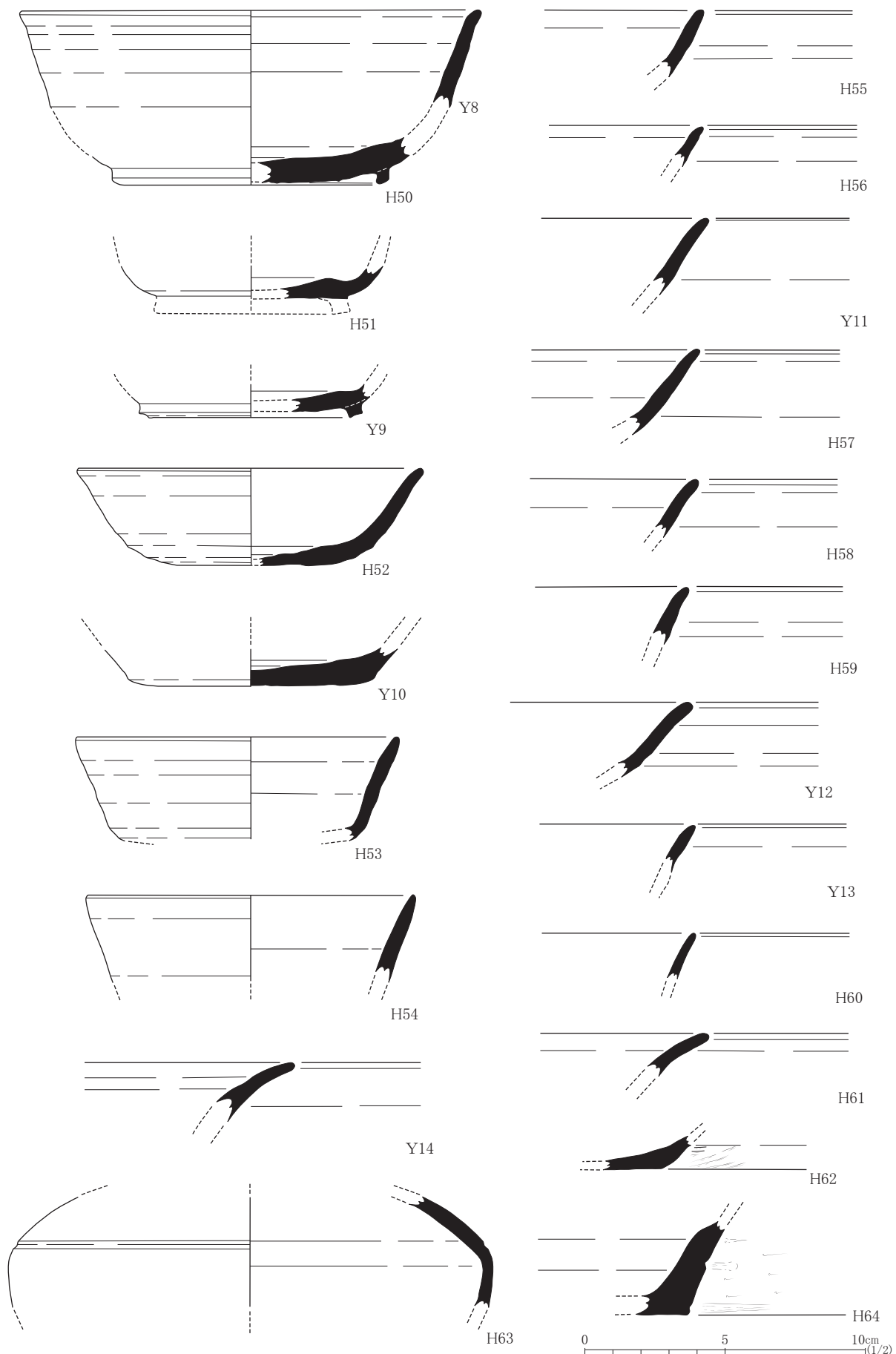


図8 第128号墳 石室外・その他出土土器実測図②

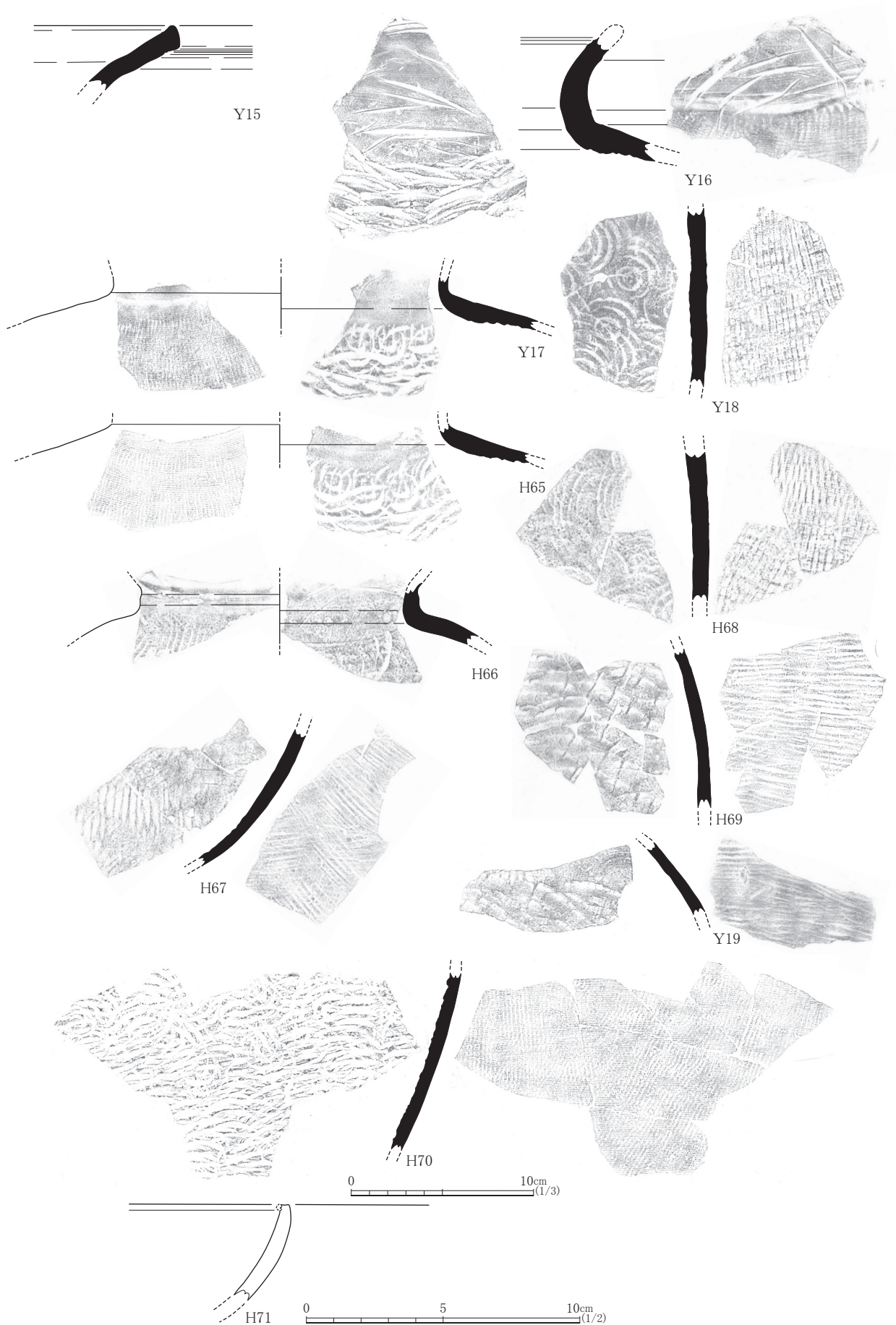


図9 第128号墳 石室外・その他出土土器実測図③



H35



H41



H36



H38



H40



H37



H39



Y3



Y4



H42



H43



Y2



H44



H45

写真7 第128号墳 石室外・その他出土土器①



写真8 第128号墳 石室外・その他出土土器②



H57



H58



H59



Y12



Y13



H60



H61



H62



Y14



H63



H64



Y15



Y18-1



H68-1



H69-1



Y18-2



H68-2



H69-2

写真9 第128号墳 石室外・その他出土土器③



Y16-1



Y16-2



Y17-1



H65-1



H66-1



Y17-2



H65-2



H66-2



Y19-1



Y19-2

写真10 第128号墳 石室外・その他出土土器④

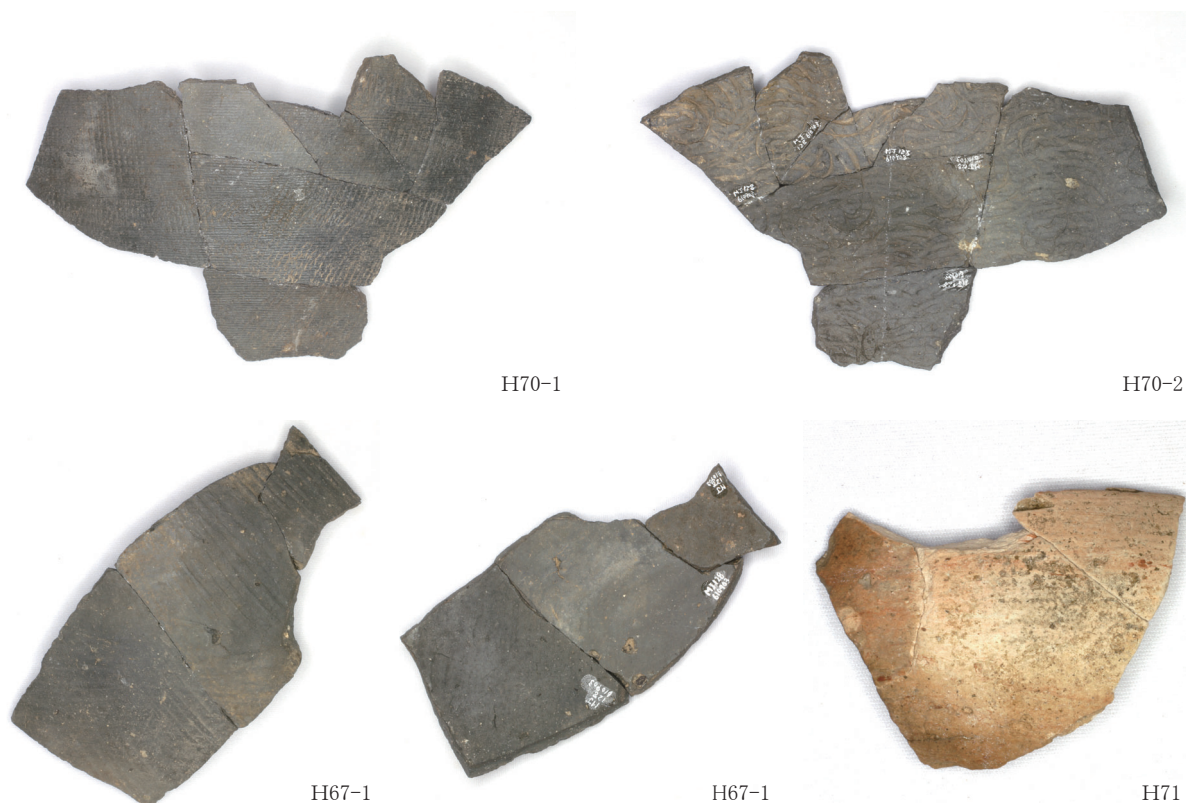


写真 11 第 128 号墳 石室外・その他出土土器⑤

体部片。小片のため径の復元は困難であるが、器壁の厚みから大甕と見られる。口縁端部を欠失するが、口縁残存部上端に2条凹線が巡る。外面は風化が著しいものの体部には縦方向の平行叩き後カキ目が施されている。内面は同心円当て具痕が明瞭に残る。頸部から口縁部にかけては内外面とも回転ナデが施される。他に同一個体と見られる破片が見当たらず、第128号墳に副葬されたとは想定しがたい。Y17とH65は中型甕の頸一体部片で同一個体である可能性が極めて高いが、接合しない。体部外面には縦方向の平行叩き後カキ目が施されている。内面は同心円当て具痕が明瞭に残る。Y17は肩部の灰被りが顕著である。H66は同じく中型甕の頸一体部片だが別個体である。体部外面に縦方向の平行叩きを施す。内面の同心円当て具痕は後のナデにより不明瞭となっている。頸部外面には円形3つ「○○○」を単位とする工具痕が連続して残る。甕体部片は同一個体の掲載を避け、特徴のあるものと大きく接合したものを報告する。Y18の外面には格子叩き後カキ目が施され、内面には同心円当て具痕が明瞭に残る。H68は掲載図上の下位には格子叩きが、上位には縦方向の平行叩きが施されており、内面の当て具痕を見ると平行叩き部裏面のみナデ消しが図られている。H69は細かな破片の接合資料で、内面の弧状格子文当て具痕が特徴的である。H15・H21・H67と同一個体と見られる。Y19も同一個体と見られるが、他の資料と接合しなかった。H70は体部8片の接合資料。外面に平行叩きを行った後にカキ目を断続的に施す。内面には同心円当て具痕が明瞭に残る。当資料の同一個体と見られるは多数存在する。

H71は出土品中唯一の図化可能な土師器の埴口縁一体部片。小片のため口径復元不能。内湾する体部から上端をわずかに凹ませる口縁に至る。口縁内端は小さく肥厚させるようだが欠失している。外面は横方向に細かくミガキが施されているようである。内面は風化が激しく調整が観察できない。外面の赤色部は塗彩であろうか。

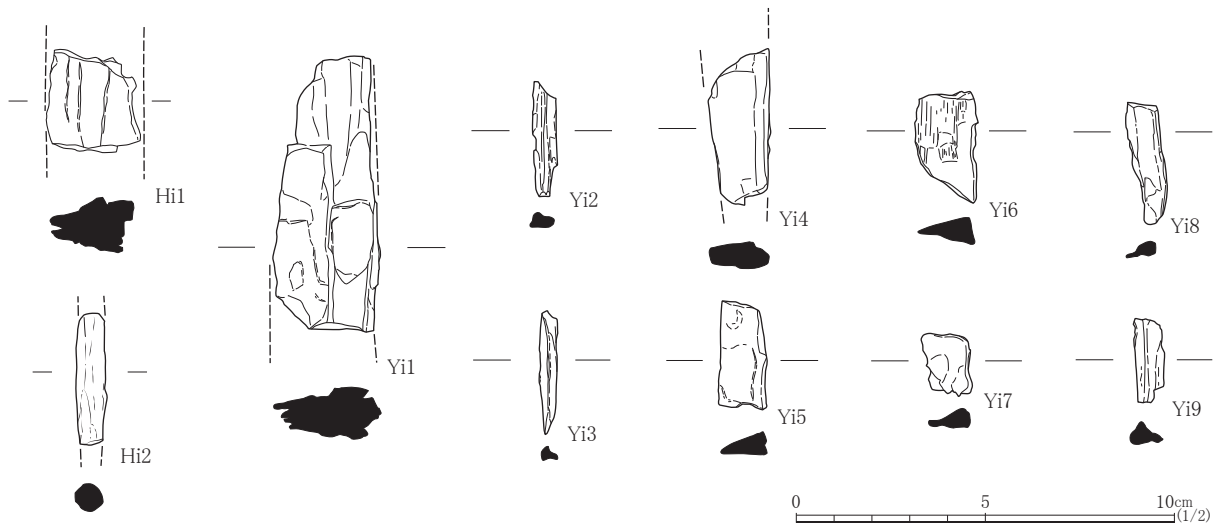


図10 第128号墳出土鉄製品実測図

第2項 金属器類

金属器類も、萩博物館と山口大学埋蔵文化財資料館に分有保管されている。『見島総合学術調査報告』には「鉄鏃片が発見されて、4片からなっているが、4本分と見なされる。いずれも細手の尖根式のものである」という一文が見られる。今回の調査で確認した金属器も鉄製品に限られたが、総数は11点(萩博物館2点、山口大学埋蔵文化財資料館9点)を数える。出土地点を見ると、山口大学埋蔵文化財資料館所蔵品は石室内床面出土品、萩博物館所蔵品は攪乱層および出土地点不明品である。土器同様、表の備考に注記カードの情報を記載しておく。

【鉄製品】(図10、写真12・13、表2)

Hi1は鉄刀刀身部片。小片であるが、遺存状態は比較的良好である。背部は剥離しているものと思われる。出土地点不明。Hi2は尖根系鉄鏃の茎部片。断面は円形に近い。攪乱層出土。

Yi1は鉄刀刀身部片。剥離が激しいが、背が一部遺存する。Hi1と同一個体か。Yi2は鉄鏃の茎もしくは頸部片か。図の左辺は原面と見られる。Yi3は尖根系鉄鏃の茎端部片。木質は遺存しない。Yi4は鉄刀または刀子の茎部片と思われる。端部を折損しているが、原面はほぼ残る。Yi5は刀子の刃部か。図の裏面は剥離している。背は原面であるか不明。Yi6は鉄刀の刀身部片と思われるが、断定できない。表面に一部木質が遺存している。Yi7～Yi9は鉄片。小片であり、いずれも鉄刀、鉄鏃、刀子などの断片であろう。これら鉄製品の総重量は125.38gを量る。

以上が第128号墳出土資料の全容である。既往報告の石棺状石室(B I 類: 第151～156号墳)出土資料に比べ、数多くの個体が遺存しているが、残念ながら土器、鉄製品ともに資料の残存状態は極めて悪いと言わざるを得ない。

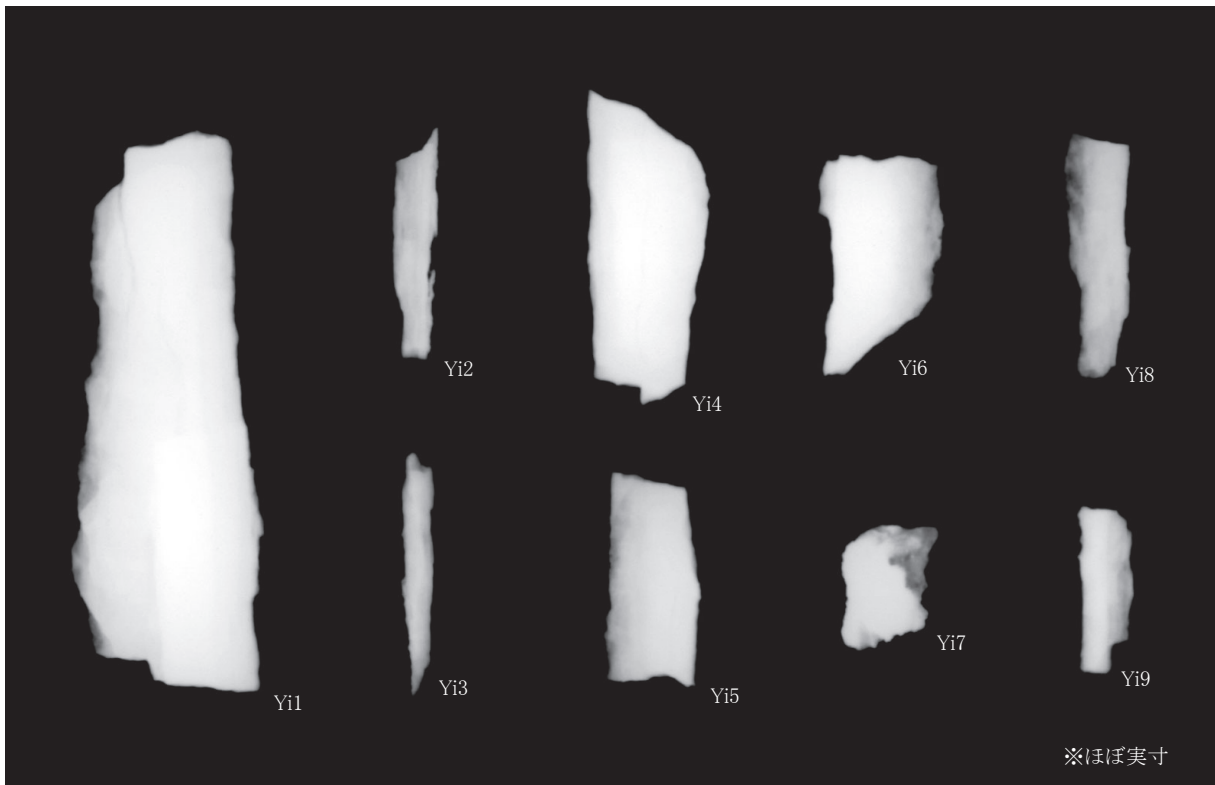
土器に関しては、蓋に比して坏身の残存状態が著しく悪く、個体数も少ない。身の数を超えて蓋が副葬されたとは考えがたいため、後世の盗掘によるものと思われる。また、小片を含めても土師器は皆無に近い。こちらに関しては、須恵器・土師器の固体強度を考えると、盗掘に原因を求めるよりは元来副葬されなかったと考えるべきであろう。

鉄製品も少数であるが、今回の調査で鉄鏃以外の存在を確認できたことは大きな成果と言える。



※ほぼ実寸

写真 12 第 128 号墳出土鉄製品



※ほぼ実寸

写真 13 第 128 号墳出土鉄製品X線画像

表1 第128号墳出土遺物(土器)観察表

萩①～⑧、山①～⑥の注記は4頁参照

法量()は復元値 △は残存値

遺物 番号	遺構・ 層位	器種	部位	法量(cm)		色調		胎土	焼成	備考
				①口径②底径③器高		①外面 ②内面				
H1	床面	須恵器 坏蓋	完形復元 可能	①(15.9) ③△2.2		①灰色(5Y5/1) ②灰色(N5/)		密	良好	平らな天井部から湾曲して口縁に降下する。口縁端部は尖り気味に丸く収める。天井部中央外面につまみが剥離した痕跡を残す。剥離面には同心円状の刻印が残る。萩⑥・萩⑧・山①・山③接合。萩③に接合しないが同一個体と見られる破片があるため床面と認定。
H2	床面	須恵器 坏蓋	天井 ～口縁部	①(18.6) ③△2.35		①灰色(N5/) ②黄灰色(2.5Y6/1)		密	良好	やや高めの天井部から湾曲気味に降下して口縁に至る。口縁端部は鳥嘴状に下垂させる。『見島総合学術調査報告』第27図4に掲載。H39と同一個体の可能性あり。萩②・萩⑧・山①・山③接合。
H3	床面	須恵器 坏蓋	天井 ～口縁部	①(18.6) ③△1.35		①②灰色(5Y5/1)		密	良好	扁平な天井部からわずかに降下し口縁に至る。口縁の外方への屈曲もわずかである。口縁端部は鳥嘴状に下垂させる。『見島総合学術調査報告』第27図4に掲載。
H4	床面	須恵器 坏蓋	天井部			①②灰色(5Y5/1)		密	良好	扁平な天井部。つまみ接着部付近で折損している。萩③・萩④接合。
H5	床面	須恵器 坏蓋	天井部	つまみ径2.2		①灰色(7.5Y5/1) ②灰色(7.5Y6/1)		密	良好	扁平な天井部に、擬宝珠形つまみを有する。外面に灰を多く被る。萩③単体の資料。
H6	床面	須恵器 坏蓋	口縁部	③△1.2		①②灰色(5Y6/1)		密	良好	外方に屈曲して開かない口縁部偏。端部は丸みを帯びて下垂させる。萩③単体の資料。
H7	床面	須恵器 坏蓋	口縁部	③△0.7		①灰色(N5/) ②灰色(5Y5/1)		密	良好	口縁下端をわずかに下方へ拡張させる。シャープなつくり。萩③単体の資料。
H8	床面	須恵器 高台付坏	完形復元 可能	①(10.4) 高台径(8.2) ③5.35		①②灰色(N4/)		密	やや不良	外方に大きく張り出した長い高台を有する坏。高台は内端で接地する。坏部は強く内湾しつつ直立気味に立ち上がる。萩③・山③接合。他に同一個体と見られる破片あり。
H9	床面	須恵器 坏	口縁部			①②灰色(7.5Y6/1)		密	良好	器壁の厚い個体で、皿の可能性もある。萩③単体の資料。
H10	床面	須恵器 坏	口縁 ～体部			①灰白色(5Y7/1) ②灰色(5Y6/1)		密	良好	わずかに内湾して口縁に至る。口縁端部は尖り気味に丸く収める。口縁外面は重ね焼きにより黒色化している。緑色の自然釉がかかる。萩③単体の資料。
H11	床面	須恵器 坏	口縁			①②灰色(N5/)		密	良好	口縁部は屈曲気味に外反する。口縁端部は丸く収める。萩③単体の資料。
H12	床面	須恵器 坏	口縁 ～底部	③3.6		①灰黄色(2.5Y6/2) ②灰白色(7.5Y7/1)		密	やや不良	平底の底部から体部は外傾しつつ直線的に立ち上がる。口縁端部は丸く収める。口縁内面下端に沈線1条巡らす。萩③単体の資料。
H13	床面	須恵器 皿	底部	①(28.4) ②(8.1) ③(3.1)		①灰色(N5/) ②灰色(5Y5/1)		密	良好	口径に比べて器高が低い皿の底部片。底部内面に重ね焼かれた痕跡が残る。Y1と接合しないが同一個体。萩④・萩④・萩⑧・山③接合。
Y1	床面	須恵器 皿	口縁 ～体部	①(28.4) ②(8.1) ③(3.1)		①灰色(N5/) ②灰色(5Y5/1)		密	良好	口径に比べて器高が低い皿の底部片。口縁内端を肥厚させる。H13と接合しないが同一個体。山③・山⑥接合。他に同一個体と見られる口縁部片(萩⑥1点、萩⑧2点)が存在する。
H14	床面	須恵器 直口壺	口縁 ～体部	①(8.7) 胴部最大径(11.0)		①②灰色(5Y5/1)		密	良好	やや算盤珠状の丸い体部に、短い口縁が付く。萩③単体の資料。
H15	床面	須恵器 甗	口縁 ～体部	①(18.0)		①②灰色(N4/) ～ 暗灰色(N3/)		密	良好	器壁の薄い中型甗。口縁部の成形がシャープでつくり慣れた感がある。口縁外端に凹線を1条巡らせ、下部を断面三角形に肥厚させる。外面には右下がりの平行叩き、内面には弧状格子文当て具痕が残る。萩④・萩⑧・山③の接合資料だが、同一個体の破片が萩③にも見られるため床面出土を含む。
H16	床面	須恵器 甗	口縁部			①灰色(N5/) ②灰白色(5Y8/1)		密	やや不良	大きく外方に開く口縁部片。端部は内外両方に肥厚させる。内面に多量に灰を被る。焼き歪みの大きい個体か。萩③・萩④・萩⑧接合。
H17	床面	須恵器 甗	口縁部			①灰色(5Y5/1) ②灰色(N4/)		密	やや不良	軽く外反する口縁部片で、口縁内面に小さな断面半円形の突帯を1条巡らせる。萩③単体の資料。
H18	床面	須恵器 甗	頸～体部			①灰色(N5/) ②灰白色(N6/)		密	良好	体部外面には平行叩き、内面には同心円当て具痕が残る。H19と同一個体の可能性もある。萩③・萩⑦・山①接合。
H19	床面	須恵器 甗	頸～体部			①灰色(5Y5/1) ②灰白色(5Y6/1)		密	良好	体部外面には平行叩き、内面には同心円当て具痕が残る。H18と同一個体の可能性もある。萩③単体の資料。
H20	床面	須恵器 甗	体部			①暗灰黄色(2.5Y5/2) ②暗灰黄色(2.5Y6/2)		密	やや不良	外面に格子叩き、内面に同心円当て具痕が残る。『見島総合学術調査報告』第27図1に該当。注記は萩⑧と同一。
H21	床面	須恵器 甗	体部			①灰色(N4/) ②灰色(N5/)		密	やや不良	内外面の痕跡からH15と同一個体と見られる。萩③単体の資料。
H22	床面	須恵器 甗	体部			①灰色(N6/) ②灰色(5Y5/1)		密	良好	外面は平行叩き後、縦および斜め方向にカキ目を施し、部分的に指でナデ消す。内面は同心円当て具痕をそのまま残す。萩③単体の資料。
H23	床面	須恵器 甗	体部			①灰色(N6/) ②灰色(5Y5/1)		密	良好	H22と同様の調整が施される。同一個体と見て良い。萩③・萩④・萩⑤・萩⑦・山③・山⑥接合。
H24	石室内 表土	須恵器 坏蓋	完形復元 可能	①(14.5) ③3.2 つまみ径2.45		①灰色(5Y6/1) ②灰色(N5/)		密	良好	ドーム状の天井部からゆるやかに内湾して口縁に降下する。口縁端部は下垂させ、丸く収める。天井部にボタン状つまみを有するが、天井中央ではなくややずれる。焼き歪みが大きい。重ね焼かれた痕跡を残す。萩④・萩⑧・山②・山⑥接合。他に同一個体と見られる口縁部片(萩⑧2片の接合)1点がある。

萩①～⑧、山①～⑥の注記は4頁参照

法量()は復元値 △は残存値

遺物番号	遺構・層位	器種	部位	法量(cm)		色調		胎土	焼成	備考
				①口径②底径③器高	④つまみ径	①外面 ②内面				
H25	石室内表土	須恵器 坏蓋	完形復元 可能	①(14.7) ③2.4 つまみ径2.45		①灰色(7.5Y5/1) ②灰色(N5/)		密	やや不良	平らな天井部から内湾して口縁に下降する。口縁の外方への屈曲はほぼない。口縁端部は鳥嘴状に下垂させる。天井部にボタン状つまみが付くが、中央に位置しない。内面に重ね焼きを行った痕跡が残る。 萩④・萩⑦・萩⑧・山①・山③接合。他に同一個体と見られる天井口縁部の破片(萩⑦)1点がある。
H26	石室内表土	須恵器 坏蓋	完形復元 可能	①(13.8) ③△2.0		①灰白色(2.5Y7/1) ②黄灰色(2.5Y6/1)		密	良好	焼き歪みが大きい個体で、一部天井部からドーム状に膨らむ部分もある。口縁部はあまり外方に屈曲せず、端部は斜め外方に下垂させる。外面に重ね焼きの痕跡(自然軸)を残すが、中心が大きくずれている。 萩④・萩⑧接合。
H27	石室内表土	須恵器 坏蓋	口縁 ～天井部	①(13.6) ③△1.55		①黄灰色(2.5Y6/1) ②黄灰色(2.5Y6/2)		密	良好	扁平な天井部から緩やかに口縁に下降する。口縁端部は屈曲気味に下垂させ、尖り気味に収める。萩④4点接合の資料。
H28	石室内表土	須恵器 坏蓋	口縁 ～天井部			①②灰色(5Y5/1)		密	良好	扁平なドーム状の天井部から緩やかに口縁に降下する。口縁端部を下垂させるタイプであるが、折損している。天井部には元来つまみが付いていたものと思われるが、折損している。 萩④単体の資料。
H29	石室内表土	須恵器 坏蓋	天井部	つまみ径2.6		①②灰色(5Y5/1)		密	良好	扁平なボタン状つまみ。 萩④単体の資料。
H30	石室内表土	須恵器 坏蓋か	天井部			①暗灰色(N3/) ②灰色(5Y4/1)		密	やや不良	器壁の厚い個体で、外面に部分的に手持ちへラ削りが施される。 萩④単体の資料。
H31	石室内表土	須恵器 高台付坏	底～体部	高台径(9.4) ③△2.2		①褐灰色(7.5YR4/1) 自然軸 黒色(N2/) ②灰色(5Y5/1)		密	良好	底部外端のやや内側に断面方形の小ぶりな高台が付く。高台は内端で接地する。体部外面に自然軸が被る。 萩④単体の資料。
H32	石室内表土	須恵器 坏	口縁 ～底部	①(14.2) ②(9.5) ③3.6		①灰色(5Y5/1) ②灰色(N5/)		密	良好	平底の底部から体部はやや開き気味に直線的に立ち上がる。口縁端部は丸く収める。 破片3点の接合品だが、すべて萩④。
H33	石室内表土	須恵器 皿	口縁 ～底部	①24内外 ②(14.4) ③2.8内外		①灰色(5Y5/1) ②灰色(5Y6/1)		密	良好	口縁部と底部は接合しないため、口径や器高が確定できない。底部から緩やかに内湾して立ち上がる。口縁端部は丸みを帯び、外端を肥厚させる。 底部は萩④・萩⑧接合。口縁部は萩⑧。
H34	石室内表土	須恵器 壺	底～体部	高台径(13.2) ③△11.15		①暗灰色(N3/) ②灰色(N5/)		密	良好	底部外端に外方に開く高台が付く。高台端部は内外とも肥厚させる。体部はあまり開かず立ち上がり、明確な肩部を形成している。頭部の同一個体は見当たらない。Y14と同一個体か。 萩④・萩⑧・山③接合。
H35	石室外その他	須恵器 坏蓋	完形復元 可能	①(13.8) ③2.5 つまみ径2.6		①灰色(10Y6/1) ②灰色(5Y6/1)		密	良好	低いドーム状の天井部から緩やかに内湾して口縁に降下する。口縁端部は鳥嘴状に外方に下垂させる。天井部にはボタン状つまみが付く。歪みが大きく、残存部の口縁は一部接地しない。 萩③・山①接合。
H36	石室外その他	須恵器 坏蓋	天井 ～口縁部	①(13.2) ③△2.1		①灰色(5Y5/1) ②黄灰色(2.5Y5/1)		密	良好	口径に比して器壁の厚い個体。低いドーム状の天井部から内湾して口縁に下降し、口縁は屈曲気味に外方に開く。口縁端部は鳥嘴状に短く下垂させる。口縁内面に灰多く被る。 萩⑥・萩⑧・山③接合。
H37	石室外その他	須恵器 坏蓋	天井 ～口縁部			①灰色(N5/) ②灰色(N6/)		密	良好	扁平な天井部から屈曲して口縁に移行する。口縁端部は欠失する。天井部外面につまみが剥離した痕跡を残す。 萩⑧単体の資料。
H38	石室外その他	須恵器 坏蓋	天井 ～口縁部			①②灰色(5Y6/1)		密	良好	扁平な天井部から屈曲気味に口縁に移行する。口縁端部と天井中央部を欠失する。萩⑧単体の資料。
H39	石室外その他	須恵器 坏蓋	天井 ～口縁部	①(19.4) ③△2.3		①灰色(N5/) ②灰色(N6/)		密	良好	口径の大きな個体で、天井部が大きく凹む。天井部から大きく内湾して口縁に下降し、口縁部は軽反させ端部を鳥嘴状に下垂させる。比較的シャープな成形。 萩③・山②・山③接合。
H40	石室外その他	須恵器 坏蓋	天井 ～口縁部	①(13.9) ③△1.9		①②灰色(7.5Y5/1)		密	良好	低いドーム状の天井部から緩やかに内湾して口縁に下降する。口縁は外方に屈曲させ、端部を強く下垂させる。 萩③・山③接合。
Y2	石室外その他	須恵器 坏蓋	天井 ～口縁部	①(13.1) ③△1.6		①灰色(5Y5/1) ②黄灰色(2.5Y5/1)		密	良好	H36と同一個体の可能性が高いが接合しない。器形の差は焼き歪みによるものか。山③2点の接合品。
Y3	石室外その他	須恵器 坏蓋	口縁部	①(13.0) ③△1.4		①暗灰色(N3/) ②灰白色(5Y7/1)		密	良好	口縁を外方に強く屈曲させ、端部を垂直に下垂させる。口縁外面に灰を被り、重ね焼かれた状態を示す。山③単体の資料。
H41	石室外その他	須恵器 坏蓋	完形復元 可能	①(12.4) ③1.9 つまみ径2.3		①黄灰色(2.5Y5/1) ②黄褐色(10YR5/2)		密	やや不良	扁平な天井部から屈曲して口縁に下降する。口縁の外反はわずかで端部は向きに下垂させる。端部に面を取っている。天井部にボタン状つまみを有するが中央からずれている。口縁外面に灰を被る。器壁の厚い個体。
Y4	石室外その他	須恵器 坏蓋か	天井部			①②灰色(5Y5/1)		密	良好	坏蓋天井部としたが、坏の可能性もある。天井外面に砂が多く付着するが、窯体と見られる。山①単体の資料。
H42	石室外その他	須恵器 坏蓋	天井 ～口縁部			①②灰色(5Y5/1)		密	やや不良	扁平な天井部から屈曲気味に口縁が大きく開く。天井部中央部と口縁端部を欠失する。内面に灰を被る。萩⑧3点の接合品。
H43	石室外その他	須恵器 坏蓋	天井 ～口縁部	①(13.8) ③△2.0		①②灰色(5Y5/1)		密	良好	扁平な天井部と見られるが、焼き歪みが大きく遺存部でも口縁全面が接地しない。口縁は軽く外反させ、端部を鳥嘴状に下垂させる。萩⑤・萩⑧接合。
H44	石室外その他	須恵器 坏蓋	天井 ～口縁部	①(13.4) ③△1.45		①灰色(5Y5/1) ②黄灰色(2.5Y4/1)		密	やや不良	扁平な天井部から緩やかに内湾して口縁に下降する。口縁端部はほぼ垂直に下垂させる。Y7と同一個体か。萩⑧単体の資料。
H45	石室外その他	須恵器 坏蓋	天井部			①②灰色(7.5Y5/1)		密	良好	扁平な天井部片。萩⑦単体の資料。
H46	石室外その他	須恵器 坏蓋か	天井部			①灰色(N4/) ②灰色(N5/)		密	良好	天井部外面に回転へラ削りが見られる。坏身の可能性も残す。 萩⑧単体の資料。
Y5	石室外その他	須恵器 坏蓋	天井 ～口縁部	③△1.9		①灰色(N4/) ②灰色(N5/)		密	良好	シャープな成形であり、わずかに外反させた口縁から端部をほぼ垂直に下垂させる。焼成状況も極めて良好。山⑥単体の資料。

萩①～⑧、山①～⑥の注記は4頁参照

法量()は復元値 △は残存値

遺物番号	遺構・層位	器種	部位	法量(cm)		色調		胎土	焼成	備考
				①口径②底径③器高	④口縁部	①外面 ②内面				
H47	石室外 その他	須恵器 坏蓋	天井 ～口縁部	③△1.45	①②灰色(2.5Y6/2) 口縁部 灰色(N4/)	密	良好		扁平な天井部からわずかに内湾して口縁に下降する。口縁は外開きに外反させた後に端部を下垂させる。重ね焼きにより口縁内外面が変色する。萩⑦単体の資料。	
H48	石室外 その他	須恵器 坏蓋	口縁部	③△1.1	①②灰白色(10Y7/1)	密	良好		口縁を外方に強く屈曲させる。端部は下垂させ丸く収める。萩⑧単体の資料。	
Y6	石室外 その他	須恵器 坏蓋	天井 ～口縁部	③△1.2	①②灰色(N4/)	密	良好		扁平な天井部から明確な口縁との境界を設けず口縁部を鳥嘴状に下垂させる。山①・山③接合。	
Y7	石室外 その他	須恵器 坏蓋	天井 ～口縁部	③△1.45	①②灰色(5Y6/1)	密	良好		H44と同一固体の可能性が高いが、口縁部内面を凹ませる。山①単体の資料。	
H49	石室外 その他	須恵器 壺蓋か	天井 ～口縁部	③△1.3	①②灰色(5Y5/1)	密	良好		天井部から内湾して口縁に至る。口縁部は尖り気味に丸く収める。萩⑤単体の資料。	
H50	石室外 その他	須恵器 高台付坏	底部	高台径(9.8) ③△1.7	①灰色(5Y5/1) ②灰色(5Y6/1)	密	良好		器壁が厚く丸底気味の底部外端に、断面方形の小ぶりな高台が付く。高台接合付近のみ回転ナデが施される。Y8とは接合しないが同一固体。萩⑧単体の資料。	
Y8	石室外 その他	須恵器 高台付坏	口縁 ～体部	①およそ16.4	①灰色(5Y5/1) ②灰色(5Y6/1)	密	良好		クロコ水引き痕が明瞭に残る。口縁を短く外反させ、端部は丸く収める。H50と接合しないが同一固体。山①単体の資料。	
H51	石室外 その他	須恵器 高台付坏	底～体部片		①②灰色(N5/)	密	良好		平底の坏底外端に高台の剥離痕が残る。残存部の全面に回転ナデが施される。萩⑤単体の資料。	
Y9	石室外 その他	須恵器 高台付坏	底部	高台径(8.0) ③△1.15	①灰色(2.5Y5/2) ②灰色(5Y6/1)	密	良好		底部外端に断面方形の小ぶりな高台が付く。高台は内端で接地する。山③単体の資料。	
H52	石室外 その他	須恵器 坏	口縁 ～底部	①(12.2) ②(5.4) ③3.5	①②灰色(N4/)	密	良好		無高台平底。体部はやや内湾気味に外方に立ち上がる。口縁は軽く外反する。萩⑥・萩⑧・山①接合。	
Y10	石室外 その他	須恵器 坏	底部	②(8.8) ③△1.3	①灰色(5Y5/1) ②灰色(5Y7/1)	密	良好		無高台平底。 山③単体の資料。	
H53	石室外 その他	須恵器 坏	口縁 ～体部		①②灰色(5Y6/1)	密	良好		わずかに外反しつつ直立気味に立ち上がる体部で、口縁部は丸く収める。クロコ水引き痕が明瞭に残る。萩⑥単体の資料。	
H54	石室外 その他	須恵器 坏か	口縁 ～体部	①およそ11.8	①②灰色(5Y7/1) 外面自然釉 オリーブ黒色 (5Y3/2)	密	良好		シャープな成形で、直線的に体部から口縁に開き、口縁部は尖り気味に丸く収める。外面には端部を除き自然釉がかかる。萩⑥単体の資料で、他に同一個体と見られる資料はない。	
H55	石室外 その他	須恵器 坏	口縁部		①灰色(N5/) ②灰色(5Y5/1)	密	良好		内湾気味に口縁に立ち上がる。口縁部は丸く収める。萩⑧単体の資料。	
H56	石室外 その他	須恵器 坏	口縁部		①灰白色(5Y7/1) ②灰色(5Y5/1)	密	良好		口縁部をわずかに外反させる。口縁部は尖り気味に丸く収める。萩⑤単体の資料。	
Y11	石室外 その他	須恵器 坏	口縁 ～体部		①暗灰黄色(2.5Y5/2) ②黄灰色(2.5Y4/1)	密	やや不良		口縁部をわずかに外反させる。口縁部は丸く収める。内面及び口縁外面と体部外面の焼成差は重ね焼きによるものか。山③単体の資料。	
H57	石室外 その他	須恵器 坏	口縁 ～体部		①②灰色(5Y5/1)	密	良好		わずかに内湾しながら大きく開く体部で、口縁が軽く外反する。口縁部は丸く収める。萩⑤単体の資料。	
H58	石室外 その他	須恵器 坏	口縁部		①②灰色(N4/)	密	良好		口縁を軽く外反させ、端部を丸く収める。萩⑧単体の資料。	
H59	石室外 その他	須恵器 坏	口縁部		①②灰色(5Y5/1)	密	良好		口縁を軽く外反させ、端部を丸く収める。萩⑥単体の資料。	
Y12	石室外 その他	須恵器 坏	口縁部		①②灰色(N4/)	密	良好		外方に大きく開く体部であり、口縁は軽く外反させ端部を丸く収める。山③単体の資料。	
Y13	石室外 その他	須恵器 坏	口縁部		①②灰色(5Y5/1)	密	良好		口縁を軽く外反させ、端部を丸く収める。山③単体の資料。	
H60	石室外 その他	須恵器 坏	口縁部		①②灰色(5Y5/1)	精緻	良好		器壁が薄く成形がシャープで焼成も極めて良好。口縁をかすかに外反させる。口縁部は丸く収める。萩⑤単体の資料。	
H61	石室外 その他	須恵器 坏	口縁部		①黄灰色(2.5Y4/1) ②暗灰色(N3/)	密	やや不良		大きく外反する口縁で端部を丸く収める。内面に高台もしくは口縁が溶着した痕跡がある。萩⑥単体の資料。	
H62	石室外 その他	須恵器 坏か	底部	③△1.9	①灰色(5Y4/1) ②灰色(5Y5/1)	密	良好		器壁の薄い底部片。体部は大きく開き立ち上がる。体部外面にヨコハケ状の痕跡が残る。萩⑧単体の資料。	
Y14	石室外 その他	須恵器 壺	口縁部		①②暗灰色(N3/)	密	やや不良		大きく外反する口縁部で、胎土および焼成具合からH34と同一個体である可能性が高い。山①単体の資料。	
H63	石室外 その他	須恵器 長頸壺	体部	胴部最大径(17.2)	①明褐色(7.5YR3/3) ②褐色(7.5YR4/1)	密	やや不良		胴の張る算盤珠状の体部片。胴部最大径の上位に凹線を1条巡らせる。器壁が薄く成形もシャープであるがやや焼成不良で酸化している。萩⑧単体資料であるが、他に2点萩⑧に同一個体の体部片が存在する。	
H64	石室外 その他	須恵器 瓶か	底部	③△3.3	①②灰色(7.5Y5/1)	密	良好		平底から体部がやや外開きに直線的に立ち上がる。萩⑤単体の資料。	
Y15	石室外 その他	須恵器 甕	口縁部		①灰色(N5/) ②灰色(5Y5/1)	密	良好		大きく外反する口縁。内外端部をわずかに肥厚させる。端部には自然釉がかかる。山③単体の資料。	
Y16	石室外 その他	須恵器 甕	頸部 ～体部		①灰色(N6/) ②灰色(N5/～N6/)	密	良好		外面は風化が著しいが、体部には平行叩き後カキ目が施されている。体部内面には同心円当て具痕が残る。山②単体の資料。	
Y17	石室外 その他	須恵器 甕	頸部 ～体部	頸部径(18.4)	①灰色(N5/) ②灰色(N4/)	密	良好		体部外面に平行叩き後カキ目を施し、内面に同心円当て具痕が残る。肩部に灰を被る。H65と同一個体か。山②単体の資料。	
H65	石室外 その他	須恵器 甕	頸部 ～体部	頸部径(18.6)	①②灰色(N4/)	密	良好		体部外面に平行叩き後カキ目を施し、内面に同心円当て具痕が残る。Y17と同一個体か。萩⑦単体の資料。	
H66	石室外 その他	須恵器 甕	頸部 ～体部	頸部径(20.4)	①灰色(N5/) ～暗灰色(N3/) ②灰色(5Y5/1)	密	良好		体部内面に平行叩きを施す。内面の同心円当て具痕はナデにより不明瞭。頸部外面に工具痕が連続して残る。萩⑦単体の資料。	
H67	石室外 その他	須恵器 甕	体部		①②灰色(N4/) ～暗灰色(N3/)	密	良好		H15・H21と同一個体と見られるが、内面に平行当て具痕も見られる。萩⑤2点が接合。	
Y18	石室外 その他	須恵器 甕	体部		①灰色(N5/) ②灰色(N6/)	密	良好		外面は格子叩き後部分的にカキ目が施される。内面は同心円当て具痕が残る。山①・山③接合。	

萩①～⑧、山①～⑥の注記は4頁参照

法量()は復元値 △は残存値

遺物番号	遺構・層位	器種	部位	法量(cm) ①口径②底径③器高	色調		胎土	焼成	備考
					①外面	②内面			
H68	石室外 その他	須恵器 甕	体部		①灰色(5Y5/1) ②灰色(5Y6/1)		密	良好	外面下部は格子叩き、上部は平行叩きが施される。内面は同心円当て具痕が残るが、上部はナデ消される。 萩②2点が接合。
H69	石室外 その他	須恵器 甕	体部		①黒色(N2/) ～暗灰色(N3/) ②灰色(N4/)		密	やや不良	H15・H21・H67と同一個体と見られる。 萩⑤・萩⑥・萩⑦・萩⑧・山⑥接合。
Y19	石室外 その他	須恵器 甕	体部		①暗灰色(N3/) ②灰色(N4/)		密	良好	H15・H21・H67・H69と同一個体と見られるが、接合しない。 山①単体の資料。
H70	石室外 その他	須恵器 甕	体部		①暗灰色(N3/) ②灰色(N4/)		密	良好	体部外面に平行叩き後断続的にカキ目を施し、内面に同心円当て具痕が残る。萩⑦・山⑥接合。
H71	石室外 その他	土師器 埴	口縁 ～体部		①②浅黄橙色(7.5YR8/3)		密	良好	内湾して口縁に至る。口縁上端はわずかに凹ませる。内端は肥厚させているようだが欠失している。外面は横方向の細かなミガキが施されている。内面は風化が激しく調整不明。 萩⑧単体の資料。

表2 第128号墳出土遺物(鉄製品)観察表

萩①～⑧、山①～⑥の注記は4頁参照

法量は残存最大値 ()は復元値 ▲は他と合計

遺物番号	遺構・層位	種類	部位	法量				備考
				①長さ(mm)	②幅(mm)	③厚さ(mm)	④重量(g)	
Hi 1	第128号墳 出土地点不明	鉄刀	刀身部	①27 ②24 ③14.5 ④16.96				萩⑧単体の資料。
Hi 2	第128号墳 攪乱層	鉄鏃	茎部	①34.5 ②8 ④3.47				尖根系鉄鏃の茎部。断面円形。 萩⑤単体の資料。
Yi 1	第128号墳 石室内床面	鉄刀	刀身部	①73 ②28 ③13.5 ④42.39				Hi1と同一個体か。 山④3点が接合。
Yi 2	第128号墳 石室内床面	鉄鏃	茎部か	①31 ②6.5 ③3.5 ④1.11				図の右辺は原面か。 山⑤単体の資料。
Yi 3	第128号墳 石室内床面	鉄鏃	茎部	①33 ②4 ③3.7 ④0.8				茎端部片。 山⑤単体の資料。
Yi 4	第128号墳 石室内床面	刀子 鉄刀	茎部	①41.4 ②16 ③7.1 ④9.16				刃部は形成されておらず、刀子または鉄刀の茎部と思われる。山⑤単体の資料。
Yi 5	第128号墳 石室内床面	刀子か	刀身部	①28 ②13 ③6.4 ④4.0				図の裏面は剥離している。背は原面であるか不明。 山④単体の資料。
Yi 6	第128号墳 石室内床面	鉄片		①32 ②9 ③4.2 ④1.74				山⑤単体の資料。
Yi 7	第128号墳 石室内床面	鉄片		①16 ②12 ③4.3 ④1.54				山④単体の資料。
Yi 8	第128号墳 石室内床面	鉄片		①32 ②9 ③4.2 ④1.74				山④単体の資料。
Yi 9	第128号墳 石室内床面	鉄片		①31 ②6.5 ③3.5 ④1.11				山⑤単体の資料。

第Ⅲ章 第137号墳の調査

第1節 昭和36年の現地調査

第137号墳も、第128号墳と同様に古墳群西部域を調査の対象とした昭和36年(1961)に発掘調査の手が加えられている。第137号墳の出土資料は、萩博物館と山口大学埋蔵文化財資料館に分有保管されているが、土器類は主として萩博物館に、鉄製品は山口大学埋蔵文化財資料館にのみ収蔵される。遺物袋に同封されている注記カードには、

【萩博物館】

- 萩①「見島ジーコンボ古墳群 137号 棺内 1961.9.3」
- 萩②「見島ジーコンボ古墳群 137号 南側棺外 1961.9.3」
- 萩③「見島ジーコンボ古墳群 137号 棺外 1961.9.3」

【山口大学埋蔵文化財資料館】

- 山①「見島 137号 棺内北東部 1961.9.3」(コンテナNO.31 袋NO.21)
- 山②「見島 137号 棺内中央部(人骨・鉄片) 1961.9.3」(コンテナNO.31 袋NO.18)
- 山③「見島 137号 南側棺外 1961.9.4」(コンテナNO.34 袋NO.5)
- 山④「見島 137号」(コンテナNO.32 袋NO.23)

の7種が存在する。カードに記載された年月日から調査経過を復元すると、第137号墳の調査は昭和36年9月3日に着手され、同日中に石室内の埋積礫土の除去まで進行し、翌4日には終了したかに思われるが、『見島総合学術調査報告』には「調査の直前には4箇の天井石が遺っていた」との一文があり、同書図版23「第137号墳発掘前状況および調査後の石室」(写真14)を見ると、発掘前状況にも関わらず天井石が除去されているため、前日の2日には作業(天井石除去)が行われていた可能性を残す。

ここでは、第137号墳の調査成果報告文と、調査時の写真(写真14～16)を転載する。

第137号墳 第128号墳の西方約6メートルの地点にある狭長な古墳である。この古墳の石室は、浜堤面が床面になるように、礫原面を掘り下げないで設けてある。石室が浜堤の上に露われるように組まれているため、築造当時の積石の高さが1メートル数10センチはあったと考えられる。調査の直前には4箇の天井石が遺っていたが、いずれも石室の内部へ転落し、積石も周囲に低く残存するにすぎなかった。

石室の方位はS37°Wで、奥行36センチ、幅50～65センチ、高さ65センチを測り、規模や形態はともに東隣の128号墳に酷似しているが、幅がやや広い。奥石には1箇の自然石を縦に用い、側石は東南側が14箇、北西側8箇が遺っていて、これらは径30～60センチの自然石を、1箇だけ縦に置けばはいずれも横に1重ないし2重に積んでその上に天井石を架し、入口を径10～30センチばかりの礫や小石塊でふさいだごく簡素な石室である(図版22下、23)。

床面は径2～5センチばかりの円礫と腐植土からなる礫床で、奥へやや低く傾き、床面から須恵器の壺と蓋杯各1個、盃4個のほか、若干の破片と土師器の盃の破片少量や器形不明の鉄製品の小断片などを検出した。人骨の遺存物は少なく、しかもそれらは四肢骨の小さな残片である。須恵器や土師器などの容器類は、他の石室と同様、入口から1～1.3mまでの範囲にまとめて副葬してあった。なおこの石室には瓦器に近い須恵質の土器が混っている。

須恵器片は50片。土師器破片少量。厚手の破片は外面に擦痕または平行条、内面に平行条または青海波をのこすものである。薄手のものは細片が多く、被せ式の蓋が確実に存していたことがわかる程度である。(『見島総合学術調査報告』429頁)



写真14 第137号墳石室調査前(北西から)
※文献7「図版23左 第137号墳発掘前の状況及び調査後の石室」を転載



写真15 第137号墳石室調査後(北西から)
※斎藤・小野1964「図版23右 第137号墳発掘前の状況及び調査後の石室」を転載



写真16 第137号墳(南西から)
※斎藤・小野1964「図版22下 第137号墳」を転載



写真 17 見島ジーコンボ古墳群史跡公園東地区(東から)
※2009年5月撮影



写真 18 見島ジーコンボ古墳群史跡公園東地区(西から)
※2009年5月撮影



写真 19 見島ジーコンボ古墳群第137号墳現況(南西から)
※2009年5月撮影

現在史跡公園として整備されている見島ジーコンボ古墳群西部域(写真17～19)において、第137号墳はシンボリックな存在となっており、各種広報物に画像が掲載される場合には被写体として選択される場合が多い。一方で発掘調査成果は芳しいものではなかったのか、『見島総合学術調査報告』においては、2ヶ年にかけて調査された全18基中、最も簡略と言える記述しか残されていない。また不可解なことに、当墳のみ石室実測図が掲載されていない。

そこで、萩市歴史まちづくり部文化財保護課に連絡の後、平成25年(2013)年7月24日から翌25日にかけて、資料調査に先立ち遺跡地での測量調査を実施し、平面図と立面図を作成した(図11)。

『見島総合学術調査報告』では、天井石は4石遺存していたとされるが、現状では5石で復元されている(南側1石は石室内に転落)。また「礫原面を掘り下げないで設けてある」とされる石室であるが、公園化に伴い盛土が施されたためか、側壁上部付近まで埋没している。

石室規模に関しては内部を測量できる状態にないため、報告通り長さ360cm^{註2}、幅50～60cm、高さ65cmと理解しておく。構造的には、石の据え方や側壁を部分的に2段に積む点など第128号墳と類似点が多いが、側壁に用いられた石材を見ると、第128号墳が長さ50cm内外の石を主として使用しているのに対し、第137号墳では長さ70～80cmと一回り大きな石材を使用しており、石室規模も第128号墳に比して一回り大きい。古墳群西部域に分布する他の石室と比較しても、敢えて「狭長」という言葉を用いて当石室の特徴を述べる必要はないように感じられる。主軸の方位に関しては、S37°Wとされ、第128号墳より大きく西に振っている。

2～5cmの円礫と腐植土からなる礫床で、奥壁へ向けて低く傾斜するという床面(写真15・16)は現地を確認することができなかった。

【註】

- 1) 時間の制約および機材の運搬上、図に標高を入れることはできなかった。
- 2) 今回の測量によると、奥壁から側壁開口部第1石までの距離は約400cmである。

第2節 第137号墳の出土資料

第1項 土器類

第137号墳出土土器類は、萩博物館と山口大学埋蔵文化財資料館に分有保管されているが、前者の所蔵は100片を超え、後者の所蔵は11片に過ぎない。今回の調査で両者の所蔵資料が接合した場合は、萩博物館に収蔵していただくこととなった。

前述の通り、遺物の注記カードは7種が存在する。第128号墳同様、石室内出土土器(萩①)と石室外出土土器(萩②・③、山③)が接合した場合は、元来石室内に存在した可能性が高いことから「石室内出土」とした。『見島総合学術調査報告』では第137号墳出土資料が図示されていないため、文中にある「床面から須恵器の壺と蓋坏各1箇、盃4箇のほか、若干の破片と土師器の盃の破片少量」がいずれの資料に該当するのか不明である。

石室外資料に関しては、「南側棺外」と「棺外」の2種が存在するものの、本稿では「石室外出土」として一括する。

『見島総合学術調査報告』には「須恵器は50片」との記述があるが、今回確認した点数はそれを大きく上回る。遺物の所属に多少の不安が残るが、以下に各個体の概要を記す。

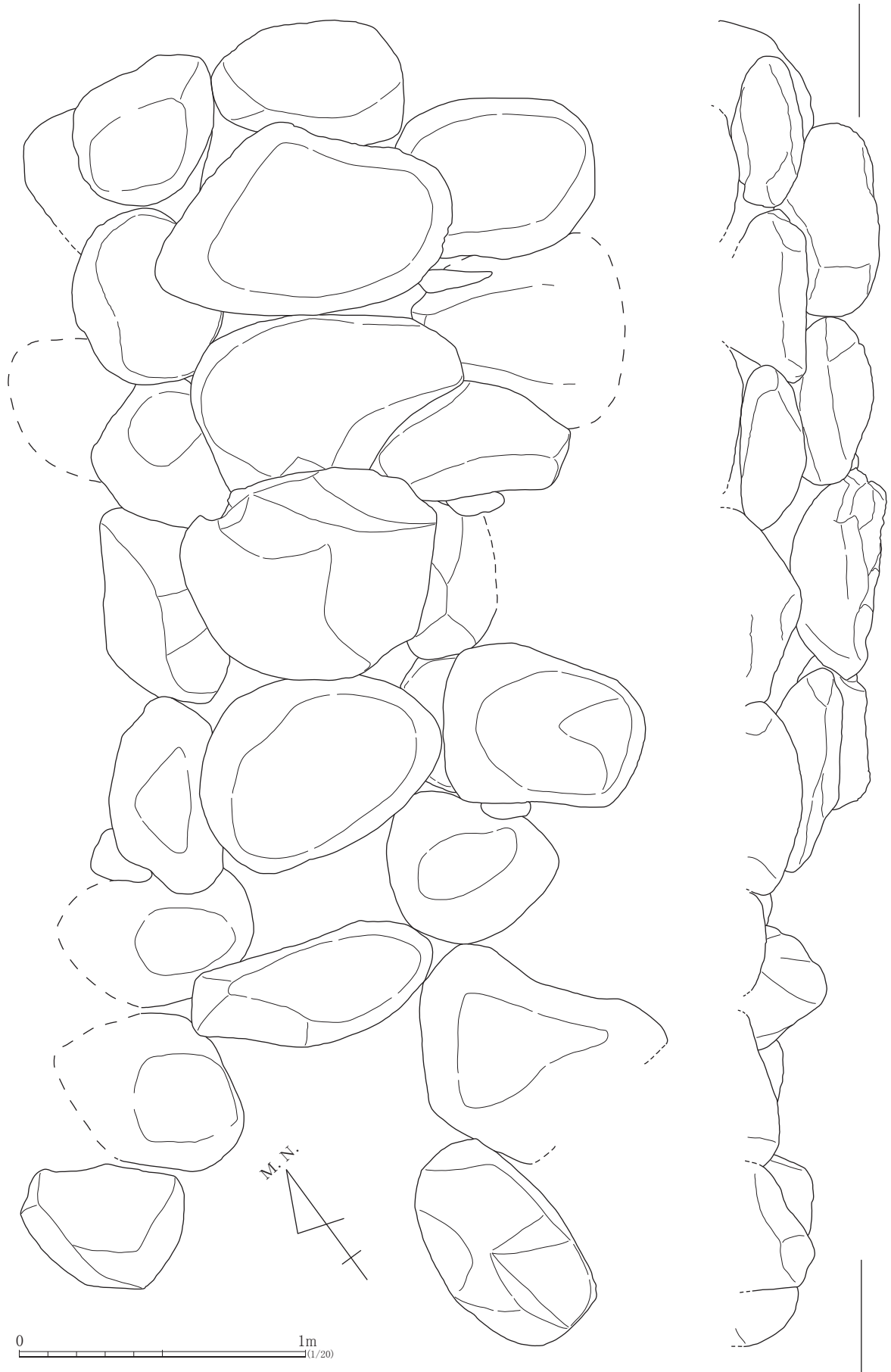


図11 第137号墳石室実測図

【石室内出土】(図12・13、写真20～22、表4)

須恵器には坏、坏蓋、壺瓶類、甕が、土師器には坏が存在する。

H1は須恵器坏蓋。つまみ部片と口縁～天井部片は接合しないが、胎土、調整、焼成具合から同一個体と判断する。扁平な天井部から屈曲気味に口縁に下降し、口縁は強く外反する。口縁端部を鳥嘴状に下垂させる。天井部中央にはやや高めのボタン状つまみが付く。口縁部とつまみのみ回転ナデ、他はナデが施される。H2も須恵器坏蓋。口縁の1/4のみ遺存している。器形や調整はH1と同様であるが、別個体である。焼き歪みが著しい。H3～H4も須恵器坏蓋。いずれも口縁～天井部片であり、扁平な天井部を有す。H3はH1・2に比して天井～口縁境界の屈曲や口縁の外反が弱く、口縁端部も丸みを帯びる。端部外面に掛かる自然釉は、重ね焼かれた状況を示す。外面は口縁部のみ回転ナデが施されるが、内面は天井部に及ぶ。H4の形状はH3同様であるが、口縁のつくりがシャープで、端部の下垂も短く鋭い。小片であるが焼き歪んでいることが分かる。調整もH3同様である。H5はさらに屈曲・外反が弱まり、天井部からなだらかに口縁に下降する。口縁端部はやや鳥嘴状で、やや外方に下垂させる。調整はH3・4と同様である。

H6は須恵器坏。完形復元が可能な資料である。器壁の薄い個体で、無高台の平底から体部が開いて立ち上がる。口縁端部は丸く収める。体部外面下端に回転ヘラ削りが施される。体部には内外面とも回転ナデ、底部は内外面ともナデが施される。H7も須恵器坏。ロクロ水引き痕が明瞭に残る体部は大きく開き、口縁はわずかに内傾する。口縁端部を丸く収める。内外面とも回転ナデ調整を施す。H8はここでは土師器坏として報告するが、ロクロ水引き痕が明瞭に残り、器壁が薄く、胎土も須恵器的である。土師質焼成であるが須恵器の焼成不良品の可能性が高い。口縁の約1/4が遺存する。内外面とも回転ナデ調整が施される。

H9～H11は須恵器壺瓶類。H9は接合しない萩①3片から図上復元を行った。算盤珠状の体部を有する壺で、頸部径は6.5cmに復元される。長頸壺と見られる。体部外面は下位までカキ目が施され、胴上位には灰が多く被る。内面は全面丁寧な回転ナデが施されている。法量に比して器壁がやや分厚い。H10も長頸壺と見られる、頸部付け根で折損した肩部片。外面にはカキ目、内面には回転ナデが施される。H9に比して器壁が薄い。なお、出土資料中に壺の底部もしくは高台の破片は存在しなかった。H11は小片であるが、外面に施されたカキ目から径を復元すると壺類にはならないようである。平瓶であろうか。器壁は分厚く、外面にはカキ目およびカキ目原体を使用したと思われる縦方向の調整痕が観察される。内面には同心円当て具痕が残る。

H12～19は須恵器甕。H12は接合しない2片から図上復元を行った。。頸部を欠失した肩部片で、外面に平行叩きが施され、内面に同心円当て具痕が残る。外面頸部付け根付近に緑色の自然釉が掛かる。同一個体と見られる破片が多数存在するが、接合しない。H13も頸部付け根で折損した甕の肩部片。H12に比して器壁が厚い。外面に平行叩きおよびカキ目が施され、内面には同心円当て具痕が明瞭に残る。外面には灰と自然釉が多量に掛かる。H14は甕の頸～肩部片。外面には横方向の平行叩きが施されるが、頸部付近はナデが施される。内面も叩き部には同心円当て具痕が残る、上位はナデが施される。外面は灰を多量に被っている。石室外出土の須恵器甕口縁部H24と同一個体の可能性があるが、接合しない。H15～H19は体部片。詳細は観察表を参照いただきたいが、第137号墳出土の須恵器甕は、内面の当て具痕のナデ消しが図られた個体が目立つ(H18・19)。外面に格子叩きが施された個体は確認できなかった。

H20は土師器坏。平底の底部片で、H8を除外すると出土資料中唯一の土師器である。

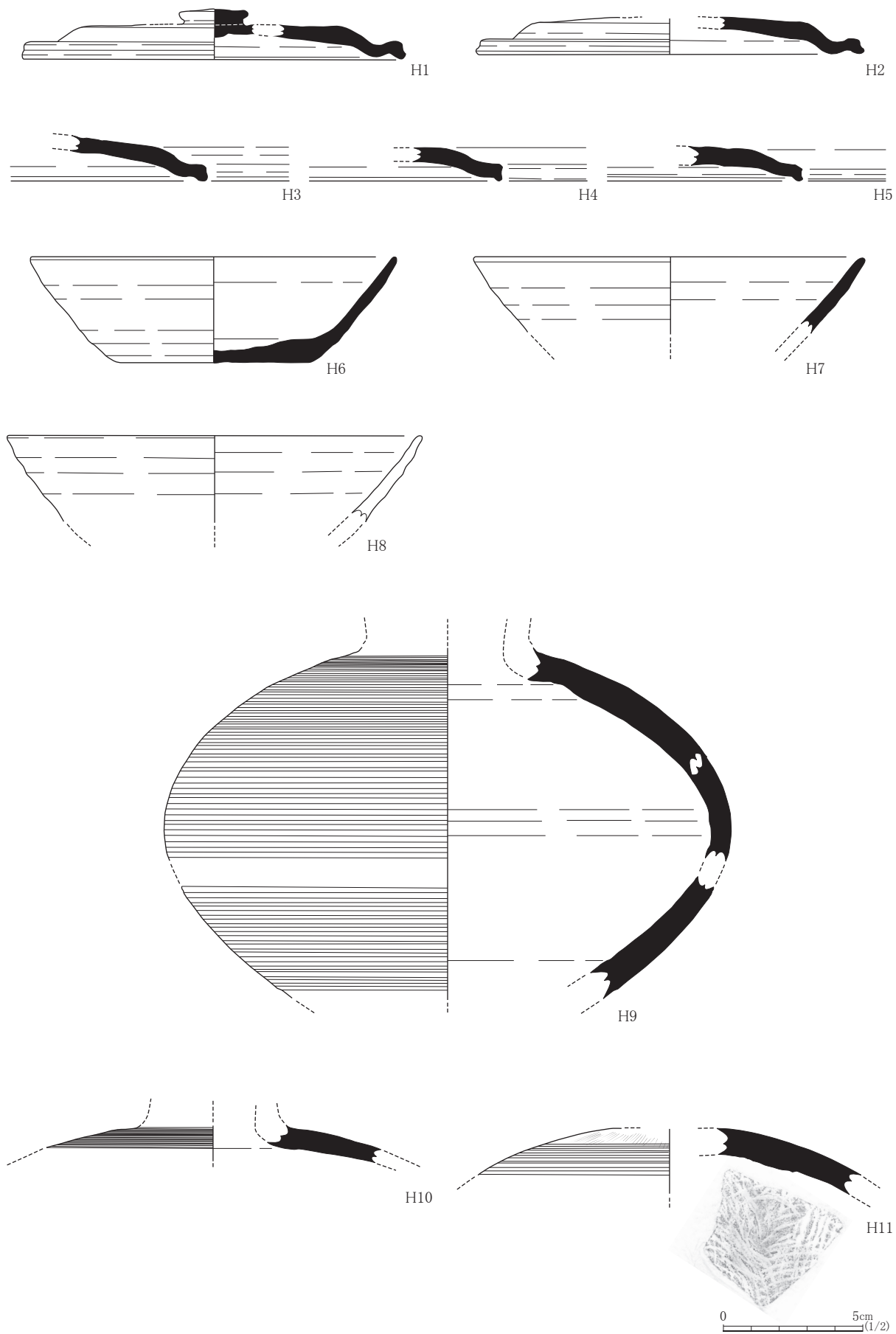


図12 第137号墳 石室内出土土器実測図①



図13 第137号墳 石室内出土土器実測図②



H1-1



H2-1



H8-1



H1-2



H2-2



H8-2



H3



H4



H5



H6-1



H6-1



H7



H10



H11

写真20 第137号墳 石室内出土土器①



写真 21 第 137 号墳 石室内出土土器②



写真 22 第 137 号墳 石室内出土土器③

【石室外出土】(図14、写真23、表4)

図化可能資料はごく少量であり、全て須恵器で、器種には坏、坏蓋、甕が存在する。

H21は坏蓋の天井－口縁部片。石室内出土資料同様、扁平な天井から下方に強く屈曲させ口縁部を形成する。口縁の外反も強く、端部はやや外方に下垂させる。口縁部のみ内外面回転ナデ調整が施され、天井部上面はナデ、内面は不定方向のナデが施される。H22も坏蓋天井－口縁部片。第137号墳出土資料中では胎土が精緻な個体である。天井部から緩やかに内湾して口縁に至る。口縁端部は短く下垂させ、接地部に面を取る。遺存部は全面回転ナデ調整が施されている。H26は輪状つまみを有する坏蓋の天井－口縁部片。つまみ端部と口縁端部を欠失する。比較的器壁の厚い個体で、平らな天井部からやや屈曲気味に口縁に下降する。口縁はわずかに外反している。外面は天井部まで回転ナデ、内面は口縁部のみに回転ナデが施されている。

Y1は坏の口縁－体部片。内湾気味に大きく開く体部を有し、口縁端部を丸く収める。ロクロ水引き痕が明瞭に残る。H7と同一個体の可能性もあるものの、接合せず、色調も微妙に異なることから別個体として掲載する。残存部内外面とも回転ナデ調整。

H24～H27、Y2は甕。H24は大きく外反する口縁部片。口縁端部は丸く収め、外端をわずかに肥厚させる。口縁外面中位には弱い段が形成されているが、意図的なものではないと思われる。口縁内面に自然釉が掛かるため、調整は観察できない。外面には回転ナデが施されている。甕体部片は数多く存在するが、ここでは特徴を示すにとどめる。石室内出土資料同様に、外面の叩きは平行叩きに限られるものの、叩き目には細粗がある。内面は同心円当て具痕と平行当て具痕が存在する。当て具痕のナデ消しが図られた資料(H26・Y2)が目立ち、中には完全にナデ消されたもの(H27)も存在する。器壁の厚みが異なるものが混在することから、大型甕と中型甕が存在した可能性がある。

第137号墳は、西部域東部に密集して築かれた墳墓群の西端部に位置するため、棺外出土品も当墳の副葬品であった可能性が高い。石室内、石室外出土の須恵器甕体部片の特徴が共通していることも、その可能性を強く示唆している。ただし、既刊報告書に指摘したことであるが(横山・松浦2012)、古墳群西部域の石室に須恵器大型甕を副葬する空間は想定しがたく、墳墓に供献されたとすれば破砕行為が伴っていたものと想像される。

第2項 金属器類

金属器類としては鉄製品のみが存在し、全て山口大学埋蔵文化財資料館に所蔵されている。『見島総合学術調査報告』には「床面から(中略)器形不明の鉄製品の小断片などを検出した」という一文が見られるが、山①「見島 137号 棺内北東部 1961.9.3」という注記カードとともに鉄製品1点(Yi1)が、山②「見島 137号 棺内中央部 1961.9.3」という注記カードとともに鉄製品10点(Yi2～Yi11)が存在することが明らかとなった。

【鉄製品】(図15、写真24・25、表3)

Yi1とYi2は接合しないが同一個体の可能性がある資料である。図上左辺は断面三角形状に狭められているが明確な刃部は見られず、刀子茎部の可能性がある。

Yi3～Yi11は鉄片。いずれも小片であり、刀子や鉄鏃など小型品の断片と思われる。これら鉄製品の総重量は8.31gを量る。

以上に第137号墳出土資料の概要を記述した。古墳群の西部域石室に総じて言えることであるが、当墳は地表に構築された石室ということもあってか、後世の盗掘が横行したようで、遺物の残存状態が極めて悪い。その中でも、本書で石室図とともに出土した土器29点、鉄製品11点を報告できたことは、僅かながらの成果と言える。

残された数少ない資料から当墳の埋葬時期に言及するならば、坏および坏蓋形態を根拠として、8世紀代に遡らせることはやや困難に感じる。大きく開く坏や扁平な坏蓋、輪状つまみの存在から9世紀前半から中頃を想定したい。

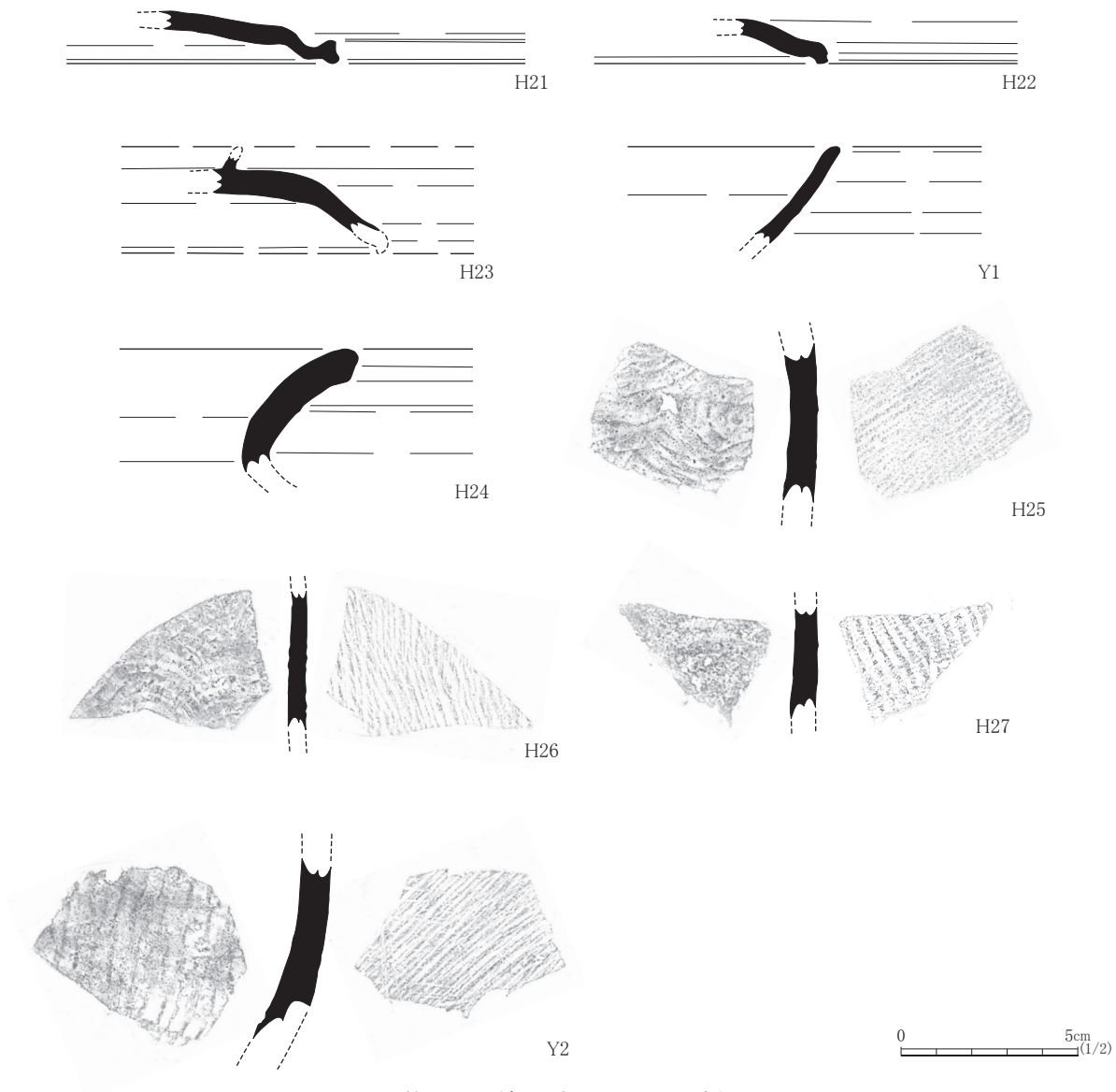


図14 第137号墳 石室外出土土器実測図

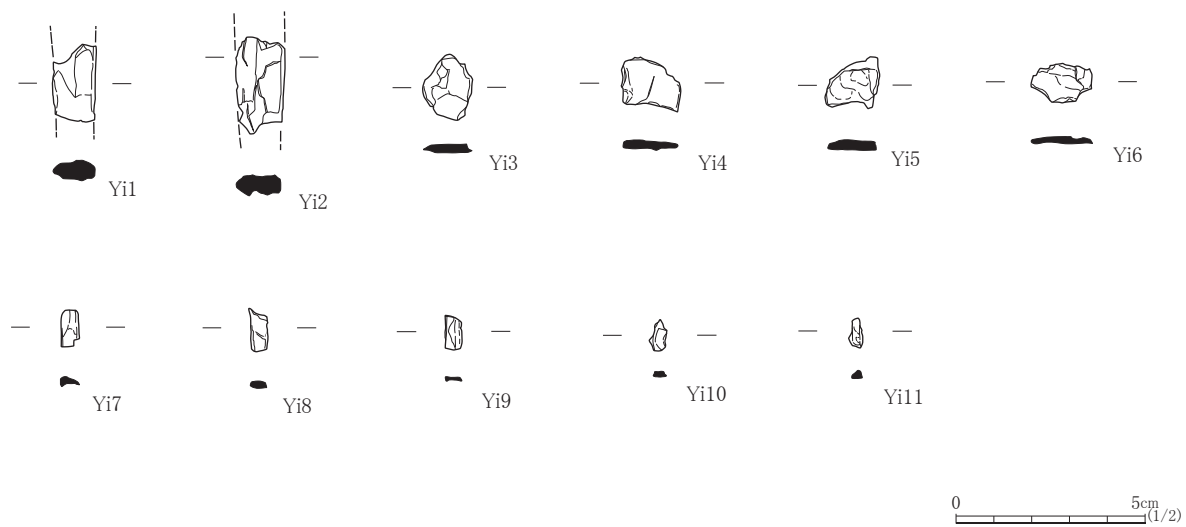


図15 第137号墳 石室内出土鉄器実測図



写真 23 第 137 号墳 石室外出土土器



写真 24 第 137 号墳 石室内出土鉄製品

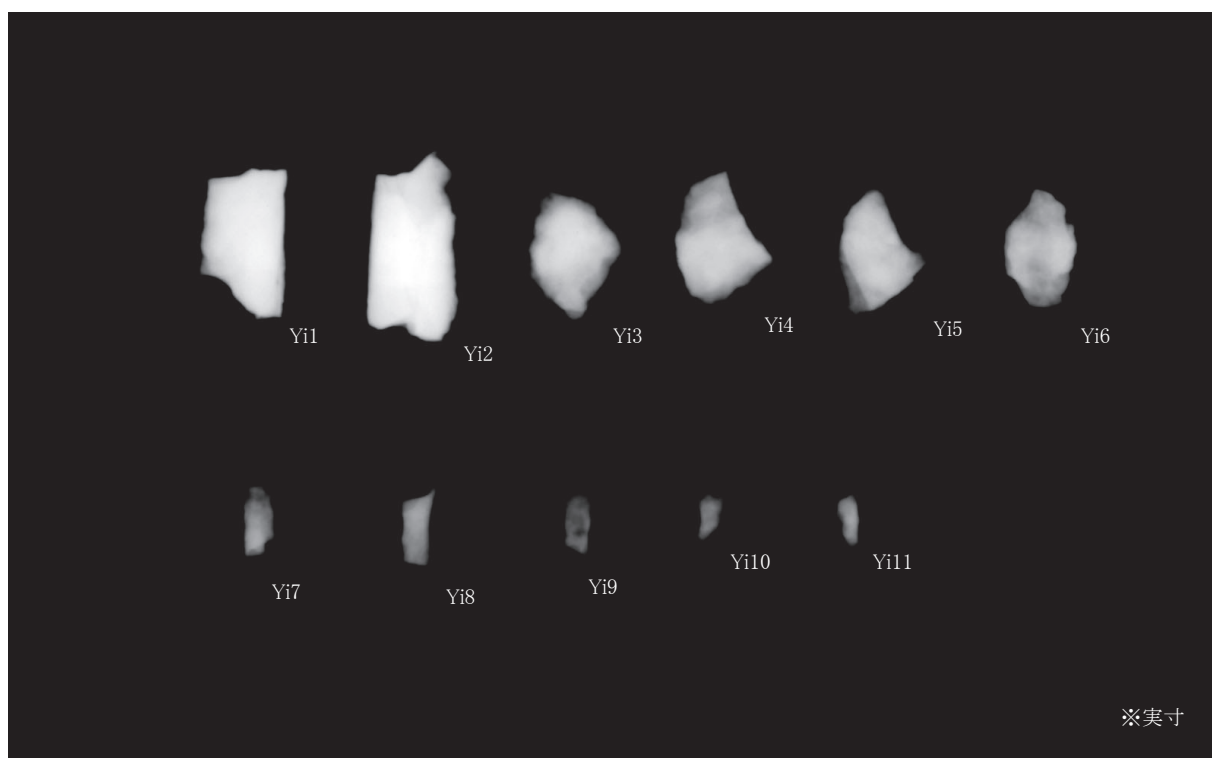


写真 25 第 137 号墳 石室内出土鉄製品 X 線画像

表3 第137号墳出土遺物(鉄製品)観察表

山①・②の注記は35頁参照

法量は残存最大値 ()は復元値 ▲は他と合計

遺物 番号	遺構・ 層位	種類	部位	法量				備考
				①長さ(mm)	②幅(mm)	③厚さ(mm)	④重量(g)	
Yi 1	石室内北東部	刀子	茎部か	①20.5	②11.8	③5.4	④2.18	明確な刃部は確認されず、茎部片と見られる。 山①単体の資料。
Yi 2	石室内中央部	刀子	茎部か	①25.5	②12.3	③5.9	④3.0	明確な刃部は確認されず、茎部片と見られる。Yi1と同一 個体か。山②単体の資料。
Yi 3	石室内中央部	鉄片		①17.7	②12.7	③2.9	④0.8	山②単体の資料。
Yi 4	石室内中央部	鉄片		①15.5	②12.5	③2.4	④0.75	山②単体の資料。
Yi 5	石室内中央部	鉄片		①13.4	②13.1	③2.5	④0.67	山②単体の資料。
Yi 6	石室内中央部	鉄片		①16.1	②10	③2.3	④0.51	山②単体の資料。
Yi 7	石室内中央部	鉄片		①9.6	②4.4	③1.5	④0.09	山②単体の資料。
Yi 8	石室内中央部	鉄片		①11.1	②4.8	③1.5	④0.12	山②単体の資料。
Yi 9	石室内中央部	鉄片		①8.7	②4.0	③1.0	④0.06	山②単体の資料。
Yi 10	石室内中央部	鉄片		①7.7	②4.2	③1.1	④0.04	山②単体の資料。
Yi 11	石室内中央部	鉄片		①7.9	②3.6	③1.6	④0.06	山②単体の資料。

表4 第137号墳出土遺物(土器)観察表

萩①～③、山①～④の注記は35頁参照

法量()は復元値 △は残存値

遺物 番号	遺構・ 層位	器種	部位	法量(cm)		色調		胎土	焼成	備考
				①口径②底径③器高	④	①外面 ②内面				
H1	石室内	須恵器 坏蓋	天井部 ～口縁部	①(13.8) ③1.8 つまみ径2.5		①灰色(N4/) ②灰色(10Y5/1)		密	良好	つまみ部片と天井部～口縁部片は接合しないが、胎土、調整方、焼成具合から同一個体と判断。扁平な個体で天井部から口縁の境界を強く屈曲させる。口縁端部を鳥嘴状に下垂させる。天井部中央にボタン状つまみを有する。萩①・萩③接合。
H2	石室内	須恵器 坏蓋	天井部 ～口縁部	①(14.0) ③△1.3		①②灰色(7.5Y5/1)		密	良好	扁平な個体で天井部から口縁の境界を強く屈曲させる。口縁端部を鳥嘴状に下垂させる。焼き歪みが著しい個体。萩①4片が接合。
H3	石室内	須恵器 坏蓋	天井部 ～口縁部	③△1.6		①灰色(N6/) ②灰色(7.5Y5/1)		やや粗	良好	扁平な個体で天井部から口縁の境界を屈曲させる。口縁端部は丸みを帯びる。端部外面に自然釉がかかっており、重ね焼かれたことが分かる。萩①単体の資料。
H4	石室内	須恵器 坏蓋	天井部 ～口縁部	③△1.2		①暗灰色(N3/) ②灰色(7.5Y4/1)		密	良好	形状はH3同様であるが、口縁のつくりがシャープ。焼き歪みが生じている。萩①単体の資料。
H5	石室内	須恵器 坏蓋	天井部 ～口縁部	③△1.2		①灰色(N6/) ②灰色(7.5Y5/1)		密	良好	天井-口縁境界の屈曲は弱い。口縁端部を鳥嘴状に下垂させる。萩①単体の資料。
H6	石室内	須恵器 坏	完形復元 可能	①(13.0) ②7.0 ③3.8		①灰色(7.5Y6/1) ②灰色(7.5Y6/1) ③～灰白色(7.5Y7/2)		やや粗	やや不良	無高台の平底から体部が開いて立ち上がる。口縁端部は丸く収める。体部外面下端に回転ヘラ削りが施される。萩①4片が接合。
H7	石室内	須恵器 坏	口縁部 ～体部	①(14.0)		①②灰色(5Y5/1)		密	やや不良	大きく開く体部から口縁はわずかに内傾する。口縁端部は丸く収める。ロクロ水引き痕が残る。萩②2片が接合。
H8	石室内	土師器 坏	口縁 ～体部	①(14.8)		①②褐色(7.5YR4/3)		密	良好	やや内湾しながら外方に大きく開く体部を有する。口縁端部は丸く収める。ロクロ水引き痕が明瞭に残る。器壁が薄く、胎土も須恵器的である。土師質焼成であるが須恵器の焼成不良品の可能性がある。萩①4片が接合。
H9	石室内	須恵器 長頸壺か	体部	胴部最大径(20.3)		①黒色(N2/) 灰被り部 灰黄色(2.5Y6/2) ②灰色(N4/)		密	良好	接合しない萩①3片から図上復元。算盤珠状の体部を有する壺で、頸部径は6.5cmに復元される。長頸壺であろうか。体部は下位までカキ目が施される。
H10	石室内	須恵器 長頸壺か	肩部			①黒色(N2/) ②灰色(N4/)		密	良好	頸部で折損した壺の肩部片。外面にはカキ目、内面には回転ナデが施される。萩①単体の資料。
H11	石室内	須恵器 平瓶か	肩部			①灰白色(5Y7/1) ②灰色(5Y5/1)		密	良好	外面に施されたカキ目から径を復元すると壺類にはならないようである。内面に同心円当て具痕が残る。萩①単体の資料。
H12	石室内	須恵器 甕	肩部			①灰色(N5/) ②暗灰色(N3/)		密	良好	接合しない2片(萩①・山④)から図上復元。頸部で折損した肩部片で、外面に平行叩きが施され、内面に同心円当て具痕が残る。外面頸部付近に自然釉掛かる。
H13	石室内	須恵器 甕	肩部			①灰白色(7.5Y8/1) 自然釉 オリーブ黒色(7.5Y3/2) ②灰色(N6/)		密	良好	頸部付け根で折損した甕の肩部片。外面に平行叩きとカキ目が施され、内面には同心円当て具痕が明瞭に残る。外面には灰・自然釉が多量に掛かる。萩①単体の資料。
H14	石室内	須恵器 甕	頸～肩部			①灰色(N4/) 灰被り部 灰白色(7.5Y7/2) ②暗灰色(N3/)		密	良好	外面には横方向の平行叩きが施され、内面には同心円当て具痕が残る。外面に灰を多量に被っている。萩①単体の資料。
H15	石室内	須恵器 甕	体部			①暗灰色(N3/) ②灰色(N4/)		密	良好	外面目の細かい平行叩き。内面同心円当て具痕が残る。萩①単体の資料。
H16	石室内	須恵器 甕	体部			①黒色(N2/) ②灰色(N4/)		密	良好	外面目の細かい平行叩き。内面は同心円当て具痕の上に平行当て具痕が重なる。萩①単体の資料。
H17	石室内	須恵器 甕	体部			①暗灰色(N3/) ②灰色(N4/)		密	良好	外面目の粗い平行叩き。内面は同心円当て具痕が残る。萩①単体の資料。
H18	石室内	須恵器 甕	体部			①オリーブ黒色(5Y3/1) ②暗灰色(N3/)		密	良好	外面は平行叩きを横方向後縦方向に施す。内面は平行当て具痕が残るが部分的に同心円当て具痕も見られ、ナデ消しが行われる。萩①単体の資料。
H19	石室内	須恵器 甕	体部			①褐色(7.5YR4/1) ②灰色(N4/)		密	良好	H18と同一個体か。内面は同心円当て具痕の上に平行当て具痕が重なり、ナデ消しが施される。萩①単体の資料。
H20	石室内	土師器 坏	底部	②(8.5) ③△0.9		①②灰色(7.5YR6/6)		密	良好	平底の底部片。体部付近に回転ナデ、他はナデが施される。萩①単体の資料。
H21	石室外	須恵器 坏蓋	天井 ～口縁部	③△1.5		①②灰色(7.5Y5/1)		密	良好	扁平な天井部から屈曲して口縁に下降。口縁の外反が強い。端部はやや外方に下垂させる。萩②・③接合。
H22	石室外	須恵器 坏蓋	天井 ～口縁部	③△1.25		①②灰色(5Y6/1)		精緻	良好	天井から緩やかに内湾して口縁に下降する。口縁端部は短く下垂させ、接地部に面を取る。萩①単体の資料。
H23	石室外	須恵器 坏蓋	天井 ～口縁部			①②灰色(5Y5/1)		密	良好	天井部に輪状つまみを有する。つまみ端部と口縁端部を欠失する。萩③単体の資料。
Y1	石室外	須恵器 坏	口縁 ～体部片			①灰色(5Y5/1) ②灰色(5Y4/1)		密	良好	内湾気味に大きく開く体部を有し、口縁端部を丸く収める。ロクロ水引き痕が明瞭に残る。H7と同一個体の可能性もあるが、接合せず、色調も微妙に異なる。山③単体の資料。
H24	石室外	須恵器 甕	口縁部			①②黒色(N2/) 自然釉 灰オリーブ色(7.5Y/2)		密	良好	大きく外反する甕口縁部片。口縁端部は丸く収め、外端がわずかに肥厚する。内面に自然釉が掛かる。萩②単体の資料。
H25	石室外	須恵器 甕	体部			①灰色(7.5Y6/1) ②灰色(N4/)		密	良好	外面は平行叩きが施され、内面は同心円当て具痕が残る。萩③単体の資料。
H26	石室外	須恵器 甕	体部			①②暗灰色(N3/)		密	良好	外面は平行叩きが施され、内面は同心円当て具痕が残るがナデ消しが図られる。萩③単体の資料。
H27	石室外	須恵器 甕	体部			①灰色(N4/) ②灰色(N6/)		密	良好	外面は平行叩きが施され、内面の当て具痕は完全にナデ消される。萩③単体の資料。
Y2	石室外	須恵器 甕	体部			①②黒色(10Y2/1)		密	やや不良	外面は平行叩き後カキ目が施される。内面は平行当て具痕が残るがナデ消しが図られる。山③単体の資料。

第IV章 まとめ

平成25年度から翌26年度にかけ、見島ジーコンボ古墳群第128号墳および第137号墳を対象に、当館所蔵資料と萩博物館所蔵資料と合わせ出土品の悉皆調査を実施した。本書はその調査成果報告である。

昭和36年(1961)に実施された見島ジーコンボ古墳群西部域の発掘調査は、10基を対象に行われた。これまで第151号墳から第156号墳までの6基から出土した資料を報告(横山2011、横山・松浦2012、横山2013)しており、これで残すところ2基(第123・124号墳)となった。古墳群西部域を総括する時期が近いこともあり、ここで安易な考察を行うことを控えるが、今回対象墳の埋葬時期にだけ軽く触れておく。

第128号墳に関しては、出土品をどこまで「元来石室内にあった」と見なすかにより評価が分かれる。ただし、今回「床面」または「石室内表土」として報告した資料だけでも時期差が大きく、一部にやや古手の須恵器坏MJ128H8などが存在しながらも、筆者は主に須恵器坏蓋の形態から初葬時期を8世紀の前半に考えており、9世紀中頃まで複数回にわたり追葬が行われたと理解している。

第137号墳は資料が少ないため推定しづらいが、こちらも須恵器坏蓋の形態から9世紀の前半から中頃の時期を推定しておく。

最後に、『見島総合学術調査報告』における第137号墳石室実測図の欠落について言及しておく。昭和36年の見島総合学術調査考古班は、斎藤忠、小野忠熙両氏を調査員に、本学助手1名と本学学生5名を助手として調査を実施している。調査期間は8月29日から9月5日の8日間であることから、8日の内に10基もの石室を掘り上げたことになる。また、現在でこそ萩市浜崎港から見島本村港まで高速船「おにようず」で1時間10分の航行であるが、当時は昭和34年(1959)に就航した萩市営「見島丸」での航行で、航行時間は2時間30分であったと聞く。山口市から萩市への移動時間や調査器機など荷物の運搬を考えると、調査初日と最終日に具体的な調査を行うことは困難だったと想像される。

現在残されている古墳群西部域石室出土の遺物注記カードから当時の調査日程を確認すると、表5のようになる。最も早い日付は9月1日で、調査が終了しているはずの9月6日の日付を持つ第123号墳の遺物1袋を除くと、事実上の掘削調査終了は9月4日であったことが分かる。特に後半期の9月3日と翌4日は、少なくとも5基に対して掘削または遺物の取り上げ作業が行われていることになり、測量作業を含めると、当時のスタッフ8名の労力はいかばかりかと、頭が下がる思いである。

さて、問題の第137号墳石室平面図であるが、結論から述べると「測量が行われなかった」のではないかと考える。理由としては、まず当館に所蔵される石室トレース図に、練習・下書き用を含め第137号墳の石室図が存在しないことが挙げられる。報告書編集過程で図が削除されたならば、トレース図は存在しても良さそうなものである。さらには、真上撮影写真(本写真15)の掲載である。『見島総合学術調査報

表5 昭和36年(1961)見島ジーコンボ古墳群調査日程

昭和36年(1961)	8月29日(火)	8月30日(水)	8月31日(木)	9月1日(金)	9月2日(土)	9月3日(日)	9月4日(月)	9月5日(火)	9月6日(水)	石室実測図
第123号墳							●		●	◎
第124号墳							●			◎
第128号墳					●	●	●			○
第137号墳						●	●			
第151号墳				●						◎
第152号墳				●						○
第153号墳						●				○
第154号墳				●	●	●				◎
第155号墳					●	●	●			◎
第156号墳										◎

※遺物出土状況入りは◎

告』に掲載された写真を見ると、古墳群西部域の調査では、石室正面または後方、もしくは斜めから低い位置で撮影が行われている場合が大多数であり、第137号分の真上撮影は異質と言える。おそらく、前述した過密スケジュールが原因となり、出土遺物が貧弱であった第137号墳の優先順位が下がり、報告書では真上撮影写真で代用、または写真から図を起こすことが決定されたものと想像される。

報告書においてBⅡ類とされた石室は少数であり、是非とも正確な内部構造を知りたいものであるが、遺跡地の現状では不可能である。山口県および萩市の今後の動向に期待したい。

【註】

1)『見島総合学術調査報告』388頁による(斎藤・小野1964)。一方で同書の凡例には「8月31日～9月6日」となっている。

平成25年(2013)夏、見島ジーコンボ古墳群第137号墳の測量のため現地に赴く前日に、見島総合学術調査考古班の責任者の一人であった斎藤忠氏の訃報に接し、遺跡地にて半世紀の時の流れを実感することとなった。末筆ながら、調査と基礎報告の労に対し感謝の意を表するとともに、心よりご冥福をお祈りする。

【参考文献】

- 池田善文(1993)「土器の基準資料と編年」、池田善文(編)『長登銅山Ⅱ』美東町文化財調査報告第5集, 美祿(山口)
- 池田善文(2004)「集成 須恵器」, 山口県(編)『山口県史』資料編考古2, 山口
- 市来真澄(2011)「見島ジーコンボ古墳群の構築時期と石室について」, 海の古墳を考える会(編)『海の古墳を考えるⅠ—群集墳と海人集団—発表要旨』, 北九州(福岡)
- 小田富士雄(1975)「萩の埋蔵文化財」, 史都萩を愛する会(編)『史都萩』第32号, 萩(山口)
- 国守進「中世の見島」, 萩市史編纂委員会(編)『萩市史』第2巻, 萩(山口)
- 桑原邦彦・池田善文(1981)「防長地域の須恵器窯跡と編年研究」, 周陽考古学研究所(編)『山口県の土師器・須恵器—編年と集成—』周陽考古学研究所報3, 光(山口)
- 斎藤忠・小野忠熙(1964)「考古の部」, 山口県教育委員会(編)『見島総合学術調査報告』, 山口
- 依教雄(1959)「第二部 沿革 第四編 古代」, 萩市誌編纂委員会(編)『萩市誌』, 萩(山口)
- 中村徹也(1983a)「[特別講演]ジーコンボ古墳群から見た見島(上)」, 史都萩を愛する会(編)『史都萩』第45号, 萩(山口)
- 中村徹也(1983b)「[特別講演]ジーコンボ古墳群から見た見島(下)」, 史都萩を愛する会(編)『史都萩』第46号, 萩(山口)
- 中村徹也・国守進(1989)「原始・古代の見島」, 萩市史編纂委員会(編)『萩市史』第2巻, 萩(山口)
- 乗安和二三(1983)『見島ジーコンボ古墳群』, 山口県教育委員会(編), 山口県埋蔵文化財調査報告第73集, 山口
- 長谷川道隆(1975)「青磁にかくされた歴史—見島出土の唐末五代越州窯青磁片—」, 史都萩を愛する会(編)『史都萩』第33号, 萩(山口)
- 匹田直・弘津史文・小川五郎・三宅宗悦・姉川従義(1927)「阿武郡見島文化の研究」, 山高郷土史研究会(編)『山高郷土史研究会考古学研究报告書—台覧紀年号—』, 山口
- 松下孝幸・分部哲秋・佐熊正史(1983)「山口県萩市見島ジーコンボ古墳群出土の平安時代人骨」, 山口県教育委員会(編)『見島ジーコンボ古墳群』山口県埋蔵文化財調査報告第73集, 山口
- 松下孝幸(1985)「山口県見島ジーコンボ古墳群の人骨—山口大学埋蔵文化財資料館所蔵の資料—」, 山口大学埋蔵文化財資料館(編)『山口大学構内遺跡調査研究年報Ⅳ』, 山口
- 三輪善之助(1923)「長門見島の遺跡」, 日本考古学会(編)『考古学雑誌』第14巻第3号, 東京
- 山本博(1935)「長門国三島村の弥生式遺跡と古墳出土遺物—特に口帯について—」, 日本考古学会(編)『考古学雑誌』第25巻

第8号, 東京

横山成己(2011)『見島ジーコンボ古墳群 第154号墳出土資料調査報告』館蔵資料調査報告書1, 山口大学埋蔵文化財資料館(編), 山口

横山成己・松浦暢昌(2012)『見島ジーコンボ古墳群 第151号墳出土資料調査報告』館蔵資料調査報告書2, 山口大学埋蔵文化財資料館(編), 山口

横山成己(2012)「見島ジーコンボ古墳群「俘囚墓説」小考」, 「やまぐち学」推進プロジェクト(編)『やまぐち学の構築』第8号, 山口

横山成己(2013)『見島ジーコンボ古墳群 第152・153・155・156号墳出土資料調査報告』館蔵資料調査報告書3, 山口大学埋蔵文化財資料館(編), 山口

渡辺一雄ほか(1983)『生産遺跡分布調査報告書』山口県埋蔵文化財調査報告書第74集, 山口県教育委員会文化課・山口県埋蔵文化財センター(編), 山口

館蔵資料調査研究報告書4

見島ジーコンボ古墳群

第128・137号墳出土資料調査報告

平成27年3月31日

編集 山口大学埋蔵文化財資料館

発行 山口大学

〒753-8511 山口市吉田1677-1

印刷 (有)三共印刷

〒759-0204 宇部市大字妻崎開作1953-8

